近世奇跡考　一

A00-5957

醒醒老人著

武清先生畫

瑞玉堂藏版

B 53125

奇跡考序

搬演傳奇之書蕃衍叢矣

説人之誤可以導愚發癡。

奇之惟可喜可愕之事。皆可

以潤色其戯謔快適之

以資説柄可以敲長夜之悪魔

消千秋之熱血矣。其醒醒人之

以為之然傳奇之

坂田文庫

體以不遵之原不據其恠影摸百般呈偽涵真為迷作之巧故蹴造化朱生之人於三千界裏抽亘古来寄々事於億萬劫間立名闘創見巧肆詭詞以美青天白日之世界不漫諸浸漬委巷婦女之耳目論使士君子之骨髄

意使古人偉事泯於湮没不傳埋寃失信長其誣世之害不為不少矣醒々先人長於戯文擅作謬悠無稽之詞罵今無忌逞之情亦云單辭使讀者解頤而不止默以其伎名於世須於人就是無根傳言而考其事據之事跡遠捜

佳時之賓。近雜俗説之妄。迺
寢録為五巻。名曰十六今青路
者云。一日携酒。訪余村居。余
時會客行酒。老人亦解飲。在
席末探懐出一小冊子。謂余
曰。願假先生一言以增價焉。余
已沾醉。乃笑而領之。其從容
已散。將就眠。皓月尚窓

杜鵑頻傳響。因挑燈側枕。
繙此人書。仰臥覽之。初翻二四
葉。頗流讀過。則搜羅之點綴
幽蹊。而漸入佳境者。如武陵桃
源步。着勝地。奚讀至其半
焉。行字裏破支離傅會之
浮説者。如入洞出洞而游於
世界矣。讀至于末焉。閲闔一而卒業。

是所謂親見者、如觀火相質、詳
觀一百以上之事矣。其博稽細
攬、使三百年間偉事義蹟之
湮沒埋冥者、復獲擿發、采
於再表白於今日焉。又其傷拾
古人之遺逸者、往昔之風俗
時態、而證之其言、恠爽朗醒
世君子之眼者、非前日戲文措循
耶媚之類也。其決謎解疑之功
亦不為不白矣。嚟全篇讀
畢、而捲巻、則村鐘報曙遙
興、掃開窓、手自斟酌酒三
杯、攬筆而書之。
暦紀文化元年甲子五月龍背生月
関東醉翁　鵬斎閑撰

醒々老人。好事士也。然其學不在乎首鉅類々書夭
下地五之史。平生喜著小說野史。以鄙俚之言。善述人
間常情。使蚩如癈無如有。又使讀者乍喜乍樂
乍悲。不知手舞足踏焉。是以無遠近。無上下。莫不知
醒々而悦之者。嗚呼。醒々為諧謔無用之言。而何使人
至于此乎。蓋醒々謔出於筆端者。其素志在不能也。須
蒐二百年來可觀可聽者。名曰近世奇跡考。如文人任
俠及俳優娼妓之徒。事跡可傳者。訪之遠近。捃摭之墳
墓。以傳沈沒不傳者。訂潤色失實者。如地理沿革。街巷
遷移。考之地圖。訪之古老。如遺器舊物。徵之好事家。
乃至童謠俚言之類。悉記以存焉。訂正之最。考據之
精。毫不為附會之說。夐異乎前日諧謔之作矣。醒々
之好事。於是乎見矣。夫人徒鶩高遠遺卑近。醒々則
欲自卑近至高遠。其用心亦良有見解。世之悦醒々
者。讀此書而後知其有真可悦者也矣。

文化改元仲夏聽雨樓主人題

知齋菴大任書

二百年来都会
地太平何事喜
書生栗華不言
江東俗又是人間
極楽樓一枝

凡例

○古を好る人その代を考てふるきことやあきらかなり千歳の物もある時ありて今あるハすくなくもあれど近き世の考ハかへりて疎かして實を失ふ事すくなからず偶口碑に傳ふるも虚妄のことぞかわる後の世にハ又今をいにしへとして考ることも人もあるべきものをとふとおもひよりしより物を秘篋に索事を珍書に探り舊蹟にいたり古墳をたづねふかく思を致して其實を得ることあれバやがてかきつけたる反故古革籠にみちぬそのうち俗耳にちかきすぢ〴〵を撰出して遂に剞人をゑらハしむ

○わらひ片言隻辞といへどもたゞしき據を得ざれバいはず

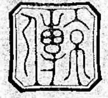
奇を好みまゝにてあらぬ虚譚を述考疎にして口碑の誤
を傳ふる説とおなじく見ることあられなバあれども予が
考のあたらざるもおほかるべし其ハ後鑒を俟てあきらかにせむのみ
凡正史といへどもおほかたむねを記るものハ多くあることをえら
むにハ便なく況源氏物語ハそらごとの書なれど其代のことを
考るにハこれを引もちふるごとく浅井了意井原西鶴等がそ
の書雛屋立圃菱川師宣等がかけるゑのごときもその代のおも
むきをもてかけるハいにしへをしるにあさからざることおほくありて
證とすべきもおほかればその由縁に俗書といへども寳とおなじ
きハそれもちゐぬ引もちゐる書名の下に上木の年號を志
るせるハそれ〲の時代をしらしめむためなり

○おもひ得たる時いそがしくかきつけたる稿本のまゝ上木し
ぬれバついでをさだめずいふことを前後し且くさ〲なれるもあ
るべし覧者あやしむことなかれもとより俗に近きをむね
とすれバ耳なれざる雅文目なれざる雅字をもちゐず識
者のためにハ見ぐるしからむことこそおほからめ
○證とすべき古画あれバ原本をさながらうつしなして露ばかり
もたがへずあらはせり古圖なきハ其代のおもむきを考
てあらたに画しむ古圖と新画とハ画風をもてわかち見る
べし古圖ハすべて予が自画なり覧者あやまりて予が筆
のつたなきを画者になすることなかれ
此書すべてよしなしごとをかきつけたるものにハあれど今に

あまて百歳のいのちをも又昔の質素をおもひて費をて
ぶらむにハまとしくもちふる所あきらかにもあらじもし後の
世に今をいのしてをしてまなぶ人あらバいささかかうがへの便
あらむ歟

文化紀元甲子春三月

江戸　醒々齋誌



近世奇跡考總目録

巻之一

一 懸想文賣
二 上野花見
三 縫箔小袖
四 六尺袖
五 氣保頭巾
六 浅草海苔
七 夜入道
八 女歌舞妓ろうさ太夫
九 左甚五郎家譜
十 高砂屋看板
十一 三谷馬駄賃附
十二 土手馬
十三 山中平九郎鬼女話
十四 成瀬川土左衛門
十五 丸山筒花入
十六 相撲櫛
十七 土手道哲并高尾
十八 小歌八兵衛

巻之二

一 佐文山戯書
二 紀文傳
三 宗珉一輪牡丹目貫
四 久米平内石像考
五 右近人形
六 小兵衛人形
七 羽生村累古跡
八 歌比丘尼
九 安楽菴落語
十 露の五郎兵衛辻話
十一 鹿野武左衛門仕形話
十二 大津繪考
十三 辰之助鎗踊猫狂言并消像

巻之三

一 古画相撲圖
二 牛若木偶衣裳
三 浅草並木櫻并浅草寺船形手水鉢
四 吉弥結帯
五 岡崎女郎衆
六 古代山葵擦圖
七 榎本其角傳
八 其角雨乞句考
九 金龍山奈良茶飯
十 芝神明千木櫃考

巻之四

一 夢市郎兵衛明石志賀之助事
二 秋色櫻并短冊
三 高尾所持鬢水入圖
四 元祖團十郎傳并肖像
五 一蝶贈宗珉文
六 浅草六地藏石燈籠
七 浅草楊枝店始原
八 白炭忠知
九 三浦高尾考
十 万治高尾出生地
十一 薩摩小平太
十二 虎屋七右衛門芝居
十三 英一蝶大津繪讃
十四 浮世又兵衛江口君圖
十五 大高子葉烟管筒
十六 深見十左衛門傳

巻之五

一 英一蝶傳
二 朝妻船讃考
三 篗懸讃考
四 助六狂言考
五 十寸見河東傳
六 竹婦人傳
七 万字屋玉菊傳
八 玉菊拳まはし
九 腕の喜三郎
十 鎌田又八
十一 加賀千代尼傳
十二 大橋柳町考
十三 地黄坊樽次酒戰
十四 鹿藏猿次郎

以上　通計七十一條

目録終

近世奇跡考巻之一

江戸　山東軒主人著

一 懸想文賣

淺井了意が曾呂里狂歌咄（寛文十二年板本）曰。往當正月元日の朝より十五日まで。年毎に懸想文とて賣けり。其出立ハ。赤き布衣に袴のそばをとり。猶それより前にハ。烏帽子を着せけるや。中ごろハ編笠をかむり。覆面して。都の町々を賣けり。是を買人あれバ。おそろき疊紙の中に。洗米二三粒入されき。懸想文とあづけて後をと一錢より百錢まで代ハ人の心にまかせき。扨その祝言ハ買ける人。あるひハ夫婦のかたらひのこと。或ハ高賣のこと。又ハ物かくすこと。その外何にてもの。のぞむことを。さまぐめでたくいひつゞけておとあるぞ

懸想文賣圖

寛文十二年印本曾呂里狂哥咄ノ古畫模出ス

元禄六年板本誹諧糸屑に懸想文賣の事を記して狂哥咄の説をおもひあはすればこゝにもしるしつ

詞花堂藏本

おもしろく賣ける詞也。さしもきこえしを時世のありさまにかはりつされ今ハこれ絶けるにや。此ごろのありさき人ハしりたるもあるべし。是ハ祇園の犬神人ツルメソありや。又ハ桂の里より出る男にや。その知る人を知らず。○按るに無点文とハいへど。女文のさまにかけるものにハあらぞ。紙背を無点文と名づけて。いまだ嫁せざる女の良縁をいのりしものなるべし。已に寛文のころさへさなりけ。此文以て詳なるべし。○俳諧の季によせて入しハ寛文三年印本[増山の井]にみえたるがはじめにて。その以前にみえる事なし

㊁ 上野花見

[紫一本]に云。東叡山黒門より。仁王門までの並木の桜の下に花見處事に松山のうち清水のうしろに幕をはりて見る人おほし。幕のおほき時ハ三百余あり。すくなき時ハ二百あまり有。此外につれだちくる女房の上着の小袖。男の羽おりを。糸当からげたる細引にておしてかつの本にゆひつけて。かりの幕にして。毛氈花むしろをしきて

酒のむ鳴物ハなかりき。小歌浄瑠璃踊仕舞ハさかりなりけるよし。本町通り町を始。有徳なるもさらなり。町かたにて女房娘正月の小袖と云ハ仕立ず。花見小袖とて或ハぬはせ物してある物きぬにきかへるを見ておもふ。花より花を見す。花の頃ハ空くもりておもふ昼過より雨ふる。されども傘をもさゝず。よきさ小袖をすきとぬれてくるを、花山なる又よかりけるとぞ云 此文天和中のありさまをこまのあらはせるなり

其頃の婦女の小袖ハ結構といへども 綿紬をかきてあつきて今よりみれバ甚質素なるものなり

三 縫箔小袖

昔の婦女ハ縫箔の小袖を礼服とす。京六条に傾城町ありし時。寛永の頃までハ遊女も地なし縫箔の小袖。なり箔の小袖を着たるぞ。島原にうつりしより。縫箔をひつたの鹿子を禁ぜられしよし。箕山が大鑑 延宝中写本 にみえたり。好事の者。惣物のかざりなどに用て。今に残れるをみるに縫箔に厳畧なる縫をして。ところどころ摺箔をしたるものあり。今地白地黒などと云もの。其遺製歟。いつの頃にか金糸の繍いできて。縫箔ハやみ。唯縫箔屋と云名のミ残れり

古代といへども縫箔ハなみなみの者の着ることあたハざる衣服なれども。おほくハ紬の地にて縫も甚厳畧なり。これ等をみても昔の質素をおもふべし

四 六尺袖

延宝天和のころ迄ハ一尺五寸を大なり袖と云。たんざなれ六尺袖をきるといひしハ。其頃のことなりき。一尺五寸四ツ合て六尺袖となる 春臺の独語にすべての男女の衣服むかしハ極て質素也。男子も女子も。十四五迄ハながき袖なり。ころに昔ハみじか尺の一尺七八寸を極りとせし。貞享の頃より二

天和年間上野花見圖

尺ばかりになりぬ。夫よりやうやくながくなりて。近きころハ二尺四五寸になりぬ云々○一蝶が四季繪跋に。髪のつとなりをこえぞ。あり袖大路をあるけばと書しも。延宝天和の頃より。享保の頃まで。大に風俗のかはりしことをしるべきなりかし

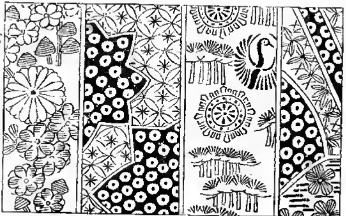
⑤ 氣侭頭巾

獨語 に。江戸の婦女外にいづるに。昔ハ氣侭とてくろき絹にて頭面をつゝみ。目ばかりをあらはしけるが。其後綿にて頭面をつゝみしハ。我廿あまり宝永のころまでありきと云。案るに今江戸に。お高祖頭巾と云もの。氣まゝ頭巾の遺製なるらん

五元集 目ばかりを氣侭頭巾の浮世哉　其角

○縫箔

本村太朝藏

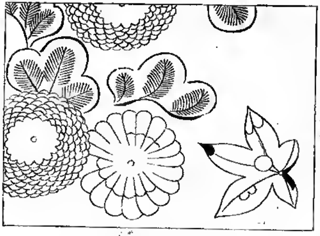


地紫リンズ。縫糸青黄赤。鶴リンボウ菊スベテ箔

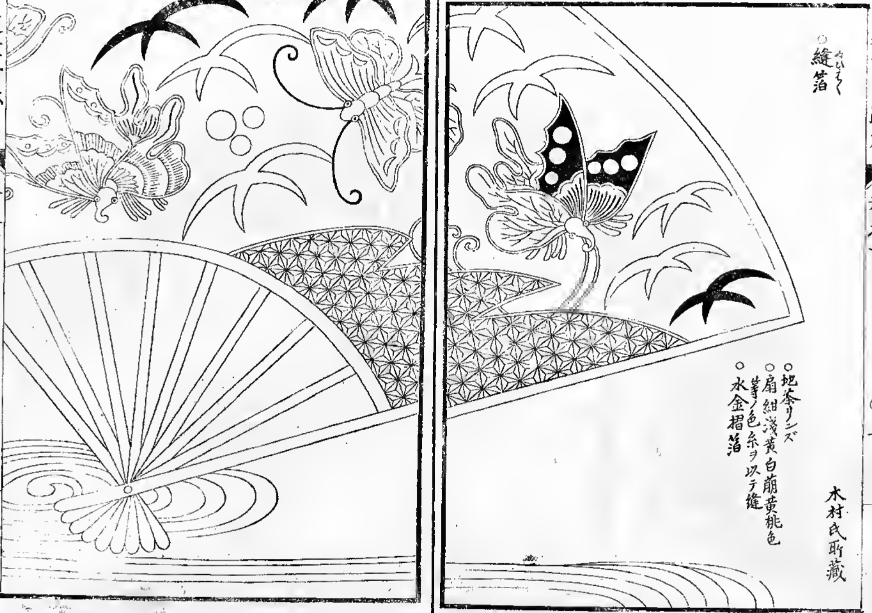
○摺箔

或云箔絵印キンノ種類

山東藏



地白茶繻。地紋金銀箔



○縫箔（ぬひはく）

○地茶リンズ
○扇紺浅黄白萌黄桃色
等ノ色糸ヲ以テ縫
○水金摺箔

木村氏所蔵

六尺袖圖

貞享四年印本女用訓蒙圖彙に此圖
ありもとのまゝうつしてこゝにあぐ。是ハ
貞享の頃の婦女のさまを見るにたれり

蕙斎藏本

(六) 浅草海苔

其角が焦尾琴に 元禄十四年板

上略 石原の椎乃あげしほに。人目まれなる境にハ。小家をむすびく
てあて。いさゝか川すぢ浅漫しけるを皆この流に入

其引　所の産を寄て

行水や何にとゞまる海苔の味　其角

雨雲や簀に干海苔の薄明り　文士

案るに右前文に石原の椎とかけるハ。本所石原。椎の木やしきといふあたり
なるべし。浅草名物の干海苔。むかしハ浅草川にてこれを取り そこにて製し
うるよし ものに見ゆれども。いつの頃までありしや詳ならず。右の二句を考ふれバ。
元禄の頃まで浅草にて製しけるとおぼし。海苔とあさくさに田家中島葛西
ふりしに。浅草川にてとりしが遠くなりしが品川より出る海苔
をとりよせて。浅草にて製しうりしかバ。ちかきころまであり。極品の海苔ハ此年し
ぐらいまでも。浅草にて製しとゞまりしとかや

七　〈ヨム〉夜入道

ころもへのたもとにはに名がくれまほし夜入ぬたふときすみや

望月の影をおもふよく似たる哉と思ひ合て　雛屋立圃

以つ付

舷に似たるうきよや〈ヨム〉夜半の月

此句正保の頃の吟也

八　女歌舞妓かつらき太夫

かぶろ物語 に見しハ今よし原町大門通りにて。来ル三月五日かつらき左夫
（有シ時代）
かぶきをどりあり。日本橋に高札をたつる。江戸に名を得し女かぶきなかしこ中にもかつらき太夫ハ世に越てあかうちゆへしく容顔美麗なりければ。此かぶきをこそみると。老若貴賤こぞりて見物すと云く。同時中橋にハく島丹後守といふ女歌舞妓ありけるよし。同書に見ゆ（予が骨董集にくはしくあらはせり）

○右かぶろ物語ハ寛永十八年の板本也　杏園蔵本

九　左り甚五郎家譜

仏殿山門等の彫物古雅なる人。来由正しからざるもみだりに左り甚五郎が作なりといひて。名誉こともせず。いづれの時代ども此所の人と云ず。詳に知る人なし。予其譜を得て。始て時代を知る。左の如し

左甚五郎　伏見人寛永十一甲戌年四月廿八日卒四十一歳

左宗心　元禄十五壬午年三月十五日卒七十一歳

左勝政　京今出川寺町住　享保十二丁未年五月十三日卒

以下畧

元禄三年板 人倫訓蒙図彙 に。天正の頃左りと号する名人ありて云　竜之鋳丸云。左甚五郎ハ関東にハ不来。播州明石に住けるとぞ

⑩ 高砂屋看板

日本橋室町一丁目。商家の軒の上に。高砂尉と姥の古き木偶あり。左り甚五郎が作と云伝ふ。案ずるに。原是高砂屋清九郎といふ菓子屋の看板也。其菓子屋ハ貞享板の江戸鹿子にものりたる舊家にて。延寶の頃ハここに住しが。他所へ轉宅せし時。彼木偶霊ありて。不思議のことどもおほかりし。此地をさることをきらふによりて。せんかたなくここに殘しおきぬ。今ハ不用のものなれども。霊あることをおそれて。とりのけざるぞ。さるものにもあらねども。一百余年を歴たる古物なり。度々の火災をのがれて。今に残れるハめづらし

⑪ 三谷馬駄賃附

むかし三谷通の若人等ハ。白馬。白鞘の刀。白革の袴。白くろりの袖。鐙まで白きを以て風流のさまとす。寛文二年板[小歌惣まくり]と云本にみえたる所ありて三谷へ通ひし駄賃附ありて左の如し

所々より吉原迄駄賃附の事

一日本づゝみより大門まで　並だちん弐百もん
　馬奴二人こむろぶしうたふかざり白馬駄賃三百四十八文
一飯田町より大門まで　あをだちん弐百もん
　馬ご二人こむろぶしうたふ鐙白馬駄賃三百四十八文
一浅草見附より大門迄　あをだちん百三十二文
　馬子二人ちよろぶしうたふかざり白馬だちん二百四十八文

是白馬を好みし證く。又明暦の頃の小歌に。春の日のいとまあけて柳がもとにひとめくぞ。ひろき馬にめしてあまたこまがひかるゝし。

白馬驕不行章臺折楊柳と云唐詩の句をやはらげたる歌に
見へし又白くゝりの袖べりを好し証あり[五元集]に
袖裏や茄よりけに白くゝり　其角
今の世歌舞妓狂言六方丹前の奴僕に扮するに白半ゑり白袖
口白裏白キ帯などを用ゆるハ。すべて古風の残れるなるべし

⑫ 土手馬

浅草寺境内に馬道と云名の残れるハ三谷への通路なる由名之
[五元集] 朝嵐馬の目でむく頭巾哉　其角
日　土手の馬くハんをむけに菜つみ哉　日
右の句に土手馬とあるも三谷馬のことなり今日本堤に立て舩よくを
よびふ舩人を土手馬といひ。嫖客につきて揚銭をとりに行。日雇の
者を附馬と云も。むかしの遺言なり

⑬ 山中平九郎鬼女話

普世にかたる話あれども。こゝにかきて伝へてよふ。山中平九郎一時
我家の二階に上りて鏡にむかひ。狂言怨霊の顔をさまぐに工夫し。
ちやせんがみやもどへきと。眼をよせ口をゆがめ心に学バせて居ける
くおもひをこらし。自然とおのれながらおそろしきばかりの仕方を
工夫しかくてこそよけれと。鏡をまへにおきて。おぼえずも立上り。
怨霊の身ぶりをなせる折しも。其妻何の心もなく二階に上りおもひ
かけず。其ありさまを見て。こハやのゝちさけびてのけさまにたふれ
て死入りぬ。家内の者その音におどろきて。二階にあつまり。気付
薬などあたへ。からくしてやうやくいきかへりぬ。平九郎思ひけるハ。我

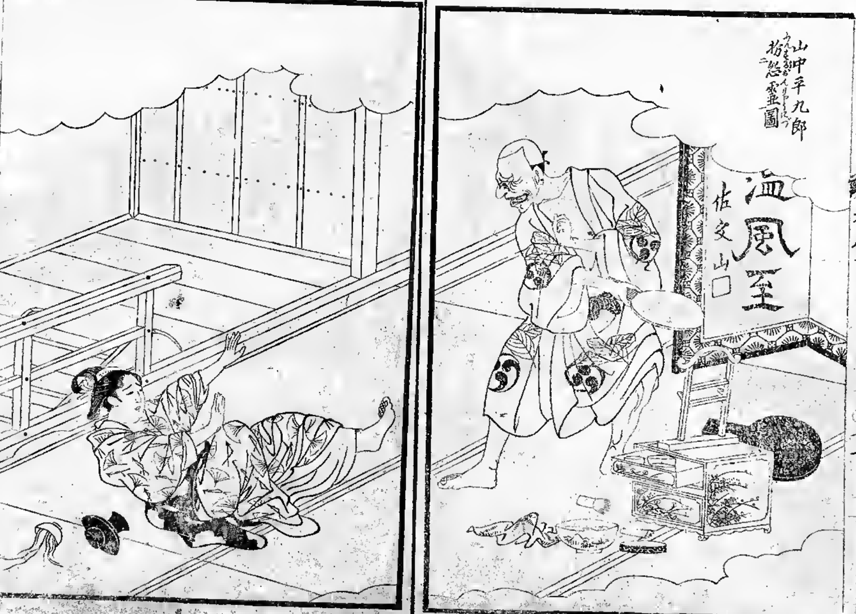
藝に精身に入りて我妻をもかくのごとし。いはんや他の見物をや。大によろこび則ち工夫を以て。狂言せしに果して見物群集せしとぞ【江戸著聞集】よりて書に妻恋隅田川と云狂言。彼妻が絶入せし時の工夫のよしをかけるは非なり。それより以前のものよしいづれの狂言にや。詳ならず。案るに平九郎は實悪古今の名人俳名を仙家と云。元禄中より盛に経て。享保九辰年五月十五日没。谷中常在寺日蓮宗に葬る。法名を冷山院壽仙と云（予が骨董集に平九郎が肖像をあらはせり）

(十四) 成瀬川土左衛門

享保九年午六月。深川八幡社地の相撲の番附を見しに。成瀬川土左衛門（奥州座）前頭のもとめにあり。案るに。江戸の方言に溺死の者を土左衛門と云は。成瀬川肥大の者なるに。水死して渾身暴脹ふくれたるを土左衛門の如しと戯れいひしが。つひに方言となりしと云。八百屋お七の狂言に土左衛門傳吉と云あるも。成瀬川が名をかり用ひたるものとぞ。以上友人照義の説之

(十五) 丸山筒花入

丸山権太左衛門は。享保のころ仙臺より出たる相撲取也。身のたけ六尺五寸。重サ四十三貫目。色黒中肥也。手形を押たるを見るに八寸余あり（予が骨董集にあらはせり）【相撲今昔物語】（杏園藏本）云。大坂天満川崎吉田氏の先祖。丸山をまねきて力量を試しに。視竹にもすべき大竹のありけるをとりてねぢきりぬ。吉田大に驚き誠に希有の大力也。此竹我家の珍器となすべしとて。ねぢきりたる竹の上下をきり。風流を尽して花入となし。丸山筒と銘し今に傳へて寵しけるとぞ。一年長崎の



山中平九郎扮二怨霊一図

相撲に下り彼地にて身まかりぬ。因に浩臺寺と云禪寺に葬る。長崎の入口日見峠と云道のかたはらに墓あり法名丸山良雄信士
丸山曾ていへるは。丸き塚ありて山のごとくなりし由なり。丸山といふ墓碑のかしらをこまかにうちつくり瘤のごとき石をあげたりしときこえぬ

蓼太撰 蓮華會集

一つかみいざまゐらせん年の豆　　丸山權左衛門

(十六) 相撲櫛

元禄の頃を盛りに経たる兩國梶之助と云相撲取。櫛をさし始しよりこれを頃前髪ある相撲取。櫛をさせる事やりて。鬼勝象之助面に白粉をぬり。二枚櫛をさしけるよし 相撲大全 に見えたり。後の世おもひ合せしと云み。頃前つけと云事をするすたりけるが彼等それをつぎあきたらずして。まゆをそらざる詞とて。櫛をさしけるとぞ。

諍ひの世は土山櫛を相撲取　　沾徳

此句 文蓬萊 に見えたり。鬼勝が身まかりしをきゝみし句となん

○兩國梶之助 因幡。丈ヶ六尺一寸五分 重サ四十貫目　○鬼勝象之助 紀伊。丈ケ七尺三寸 重サ四十二貫目

(十七) 土手道哲并高尾

吉原恋の道引 延宝六年板本 堤のかたはらにいほりとかやいひてある庵あり。是をいふことゝふに。さりし明暦の頃より道哲といひし道心者世をむつかしくや思ひけん。あるおかみさた。といふ庵をあん結びて住しが。二六時中鉦の声たえせず。ゆふつけはかりに聞えていかなるも哀をもよほさぬはなし云々 紫の一本 天和三年写本 に。日本堤のきはに道哲が寺あり。あるものゝ申に。湖しきを道哲が鉦の声ありて今も寺百作ぶしの小哥にそつちでうて道哲が唱も此寺之云 事跡合考 延享三写本 に今戸橋

新吉原の南。木戸ぎハ西方寺と云寺の前なり。土高き所空地にて千
閒斗りの長さ。幅ハ二間ばかりもあらん所。昔つみんどを刑せられ
ところ也。その時道哲と云道心者。彼罪人仏果得脱の為に昼夜念
仏しけるが。滅後此西方寺に葬りし由なり。道哲の唱ありと云[沾涼説]
に弘願山専称院西方寺ハ。開山念誉上人也。巡誉道哲ハ住職にあらず。
常念仏発起の願主道心者也。徳ある僧にて。世人当寺開山のやうに
云来れりと云

案るに。道哲在俗の時。三浦屋の高尾が私夫なりと云ハ妄説也[事跡]
[合考]の説のごとく。罪人得脱抜苦の為定念仏し。ここに吉原のこと
しざる以前より住し道心者なるべし疑なし。土佐がし[三世二河白]
[道]と云に。高尾道哲が教化によりて成仏しけるよしを作りし

より虚妄を伝へしなるべし。予西方寺にいたりてたづねしに。道哲万治三
年十二月廿五日。高尾ハ同日に寂せりと云。されど[高尾道哲引]に道哲庵
の図を出せるを見。[紫の一本]の文を考れバ。延宝天和の頃までながら
へしやうに思はる。道哲が墓の年月を記さざる也。是に詳ならぬとみえたり

○汗かきの弥陀　立像三尺。安弥作。道哲持仏。今西方寺本尊是也

○道哲之墓　同寺にあり。道哲の石像。定念仏の姿をきざむ　法号年月等なし

○高尾襟掛地蔵　銅仏立像。一寸八分。高尾守袋へ入し仏なり。同寺にあり

○同墓　同寺にあり。碑面に地蔵を刻る。上に紅葉の紋あり。右に転誉妙身信女　万治三庚子年十二月廿五日。左りに「寒風にもろくもちる紅葉哉」とあり。墓のうしろに紅葉の木あり。高尾の紅葉と云。今のハ若木なり

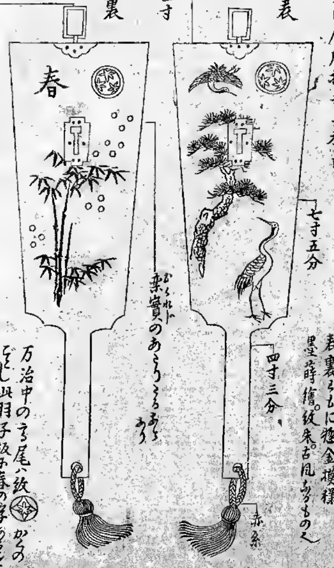
○同位牌　同寺にあり。法名前の如し。惣高二尺余

○同所持羽子板　同寺にあり。下に図をあらはす

道哲墓之圖

惣高四尺余

高尾所持羽子板圖

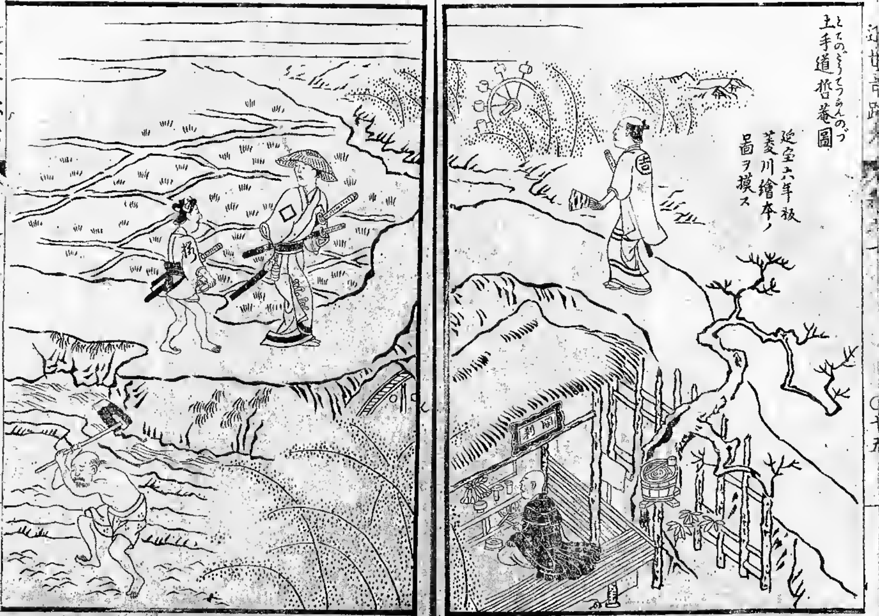


此金具ハ後につけて[illegible]にしたるもの也

栗實のあらはるゝあり

表裏ともに惣金。模様墨蒔繪。紋朱。古風なるもの也

万治中の高尾ハ紋かくのごとし此羽子板に春の字あるをもつて予が考あれどここにハもらしつ



土手道哲庵圖（とてのだうてつあんのづ）

延宝六年板菱川繪本ノ畵ヲ摸ス

購入
本
紀元二千五百七十一年
明治四十四年十二月廿三日

○附云。同所三谷町春慶院にも高尾の墓あり。法名辞世ハおなじといへども。死せる年も日ハおなじからず。万治二己亥年十二月五日とあり。ふたつながら是ならん

（十八）小歌八重清

貞享の比。浅草田町に住し三味線の師也。小歌の上手なるによりて。これを名づくるとぞ【洞房語園】元文三年印本に云。小歌ハ八重楽が娘。孫多を不残して出奔せしを。八重楽腹立して久離しける。此時並木寿見斎が狂歌に

ぬまもあらぬ娘が中ハ海老尾がしれつつて小歌ハ八重楽

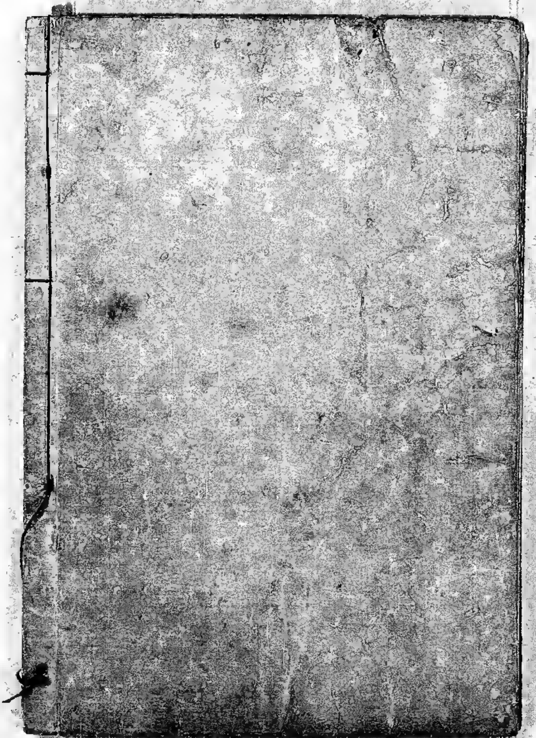
○案るに。寿見斎ハ吉原角町に住ス。其角門人にて俳名を不曲といふ

【五元集】八重清やあらざるまい虎が雨　其角

此句も小歌八重楽がことなるらん

奇跡考巻之一終

狩野文庫



近世奇跡考　二

A 00
5357

瀧澤文庫

近世奇跡考巻之二

山東軒[illegible]人 著

滋慶書庫

一 佐文山戯書

佐々木氏名ハ襲字ハ淵龍。文山と号し。墨花堂と称す。俗称百助玄龍の弟也。西窪に住す。志風流に厚く。兄玄龍とともに書を以て名あり。当時に都鄙神社仏閣の扁額皆書を文山にもとむ。性甚酒を好み。酔裏筆をふるへハ殊に絶妙也。世に酔龍の猿牙と云。榎本其角ハ玄龍に書を学ぶ。故に文山とも親しく酒友の交りをなし。一日文山冨家の主人一説に紀文ト云および其角と花街にあそび。酒宴ある時。揚屋の主人文山が書名あるを知りて。春山桜花を画ける屏風を出して賛辞を乞。文山筆をとりて此所に

A00-5957

B 53125

便無用にて書し。主人これを見て頗不興の色あり。其角筆をとりて。
これにつきて花の山と書りに俳諧の一句となる

此所小便無用花の山

主人大によろこびしに家宝となせり。其後あづま童の口ずさみとなりしが。此に
小便無用佐文山といふもありけるとぞ。

此事世に伝へて風流の話柄となせり。文山享保十年乙卯五月七日病て没せり。享年七十七芝増上寺塔中浄蓮院に葬る

㊁ 紀文伝

紀伊国屋文左衛門は。材木問屋を家業として。世にきこえし豪家の性活気にして常に花街雑劇にあそびて任侠をこのむ。千金をなげうちて快しとせり。故に時の人紀文大尽と称して。標名一時にひゞけり。宝永の頃まで本八町堀三丁目すべて一町紀文が居宅なり。毎日定りて畳さし七人づゝ来りて畳をさせり。これ客をむかふる度に。あたらしき畳をしきかへさせるためなりとぞ。此一事をもつて。其豪富なるを知るべし。其後紀文が家に出入せし畳屋の子孫。今猶本八町堀二丁目にありて。此事をかたりき。又一時揚屋町泉屋平四郎がもとにて升に小粒金を入て蒔あるきしと云。伝ふ正徳の比家おとろへ剃髪して。深川八幡一の鳥居の辺に住しが。享保十九年四月廿四日。其隠宅において身まかりぬ。深川霊巌寺塔中浄等院に葬る。法名を帰性融相と云

紀文俳諧を晋子其角に学び。千山と称せり。紀文其角。敬雨等と志をしうし證左にあるは

【五元集】 千山宅とし忘に
剃まぞや八乙女が繰男より　其角

紀文追儺圖

近世奇跡考 巻之三

同　千山ヨリ菊ヲ得テ
大平良のうしろを翔や瓶の菊　同

同　千山亭新宅雪舟の絵に
隅に菊を添るこそゆかしく五月雨　同

柯葉集　千山亭にて
そうりく老の眼や土用干　敬雨

同　悼紀文亡父
手あしやるくちに出る膝のうへ　同

○紀文ハ一代の富家なりとおもふ人おほし。已に父あり。父紀州熊野より
江戸にいでゝ一代にとみけるとぞ

菊のちり　多ゝ女撰
三続の摺物会するで裏の菊　千山

香非時　に其角一周忌に紀文が手向の句あり
黒方や年ハ経れども朧月　同

類柑子　に風流をこのめきの飛花を惜むとかきて左の句あり（普も其角追悼の句之）
今もいま錦繍の人よふこゑ　同

紀文がうへにつきてハいろいろの奇談あれども人口に伝ふるのみ。たしかなる証もなければこゝにもらしつ

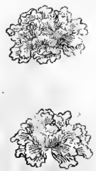
後ハ昔物語　に寛延の比。俳諧師存義。小網町より深川八幡一の鳥居の北側にうつり住。其菴ハ紀文が衰へて後住ける家なりといへり。き諳あれハ記しおきつ

㊂宗珉一輪牡丹目貫

宗珉横谷氏。名ハ友常。遯菴と号す。俗称次兵衛。檜物町に住す。一輪牡丹の目貫といふハ世に一具の名物也。伝へて云。宝永の比紀文宗珉に牡丹の目貫をのぞみ手附金十両をおくる。三年過ていまだならずとて紀文待侘て。あまりに催促せしかども仕方宗珉が意にかなはずとて。手附金をもどし此。其後やゝ過て彫り上りたるをもちて紀文にあらぬある富家某にあたふ。某金五十両を以て謝物とせし。宗珉これより生涯一輪牡丹をほらず。世に一品の名物になりしとぞ。宗珉享保十八年夏身まかりぬ

彼目貫ハ某氏の秘蔵なるを友人戸張氏。かきこ一覧して露なくらは
ありへてうつし図をうつしとめて。下にあらはす

惣金



宗珉作　ありつけかくのごとく よふにあり

(四) 久米平内石像考

浅草寺の境内に久米平内の石像と云ものあり。何人の像とふ事詳ならず。瀬田問答に云、氏ハ久米にあらず。兵藤平内と云。一書ニ妻ハ久米氏之由。兎角に世に誤て久米平内と云。菩提寺ハ駒込鰻縄手海蔵寺（大智山と云禅寺也）。一書ニ青山生石の夫婦同會の墓碑あり

兵藤氏　無関一素居士　　久米氏　松室瑩壽大姉

右の法名ならびてほり付あり。此碑ハ平内存生の時建置しを死後に死せる年月をほり入ざれバ、其年月詳ならざる所、浅草寺。平内か石像のかり家のうしろに、又同會の墓碑ありて年月をしるす

上ニ仏像アリ　無関一素居士　天和四癸亥年六月六日
松室瑩壽大姉　貞享二乙丑年十二月十三日

案ニ癸亥ハ天和三年にあたる。これも平内が存生の時建おきたる故、後に年月をほり入たる時の誤ならめ

かくのごとくなれバ死せる年月ハあきらかなりといへども、いづれの家に仕へし武士なるか。諸説ことに異にして詳ならず。浪人して赤坂に住とも浅草寺後門の外金剛院に借地して住ともいへり。強勇の者にて鈴木九太夫入道正三（石平道人ト云因果物語二人びくにの作者）の門人なり。仁王座禅の法を修行せ。彼石像ハ其かたちなりとぞ

(五) 右近人形

[已往物語本]に昔右近源左衛門と云若者京都より下り三味線引一人地うたひ一人にて藝をする時今のかつらなどと云もののなく黄いろのふくさものに糸をきぬを付額にあてて月代をかくしたる。南條奇麗の若者なれば女のごとくに見ゆる。此藝ハ海道下り。山崎下りなど云る行の歌を地うたひにうたはせ。それを小舞にして舞ふ。又ハ業平餅紙買などいふ小舞を独狂言に舞ふ。諸人おもしろがりて見物せし。此源左衛門黄なるふくさものをかぶりたる体を。人形にもなしても作り。紙にて張ぬきにも作りて。おびたゞしく売ると云

案るに寛文二年市村座にて源左衛門海道下りの狂言をせしと唱哥予が骨董集に詳く

(六) 小兵衛人形

江戸に名高く聞えし。坊主小兵衛と云俳優ハ。延宝。天和。貞享の頃を盛に経たる外形之かしら糸鬢にて。かりそめにみれバ坊主のごとくなれバ坊主といふめり。同時に坊主百兵衛坊主段九。小坊主などいふ俳優あり。皆小兵衛をまねびたり。これ小兵衛が姿を五月の兜人形に作りそめて。これを小兵衛人形といふ。ことに後段十郎小太夫などをも兜人形に作りしとぞ　以上元禄六年板本[四場居百人一首]に見ゆ　其角が小兵衛人形の句左の如し

[五元集]

我むかし坊主小兵衛や花菖　其角

此友や年をとりてさぞ白髪ニ毛の身をもちいれて松どの左郎どのあたりとのかたれバ今の人形の風俗ことさらに小兵衛などいふ人形ハなし

同

坊主小兵衛が心してよく小兵衛坊主と申けれハ

坊主小兵衛坊主とかけり花　同

案るに小兵衛をさき羽おりを好みて着たりけるにや。これの世の人かんさ毎の出羽おりこの名いつべし。おもひあはするに写本[洞房語園]に寛永の頃二朱判吉兵衛と云大尽舞に小兵衛の坊主毎の出羽おりを作りしも見え[本朝文鑑]に支考が狂名を坊主仁和といひしもふる事にあやかりてつける名なりといづれ世にめでられたる者とおぼゆ

右近源左衛門舞圖（まひのづ）

古画ヲ摸ス

元禄六年印本
四場居百人一首ニ
此圖アリ摸出ス

上ニ狂哥アリ畧

談洲樓藏本

七 羽生村累古跡

下総國岡田郡羽生村百姓与右衛門妻かさね。正保四年亥八月十一日夫与右衛門が為に絹川において殺害せられし事ハ今にかさねが淵と云与右衛門後妻をむかふる事五人みなかさねが為にとり殺さる六人めの妻娘きくといふむすめハ十三の年。寛文十一年亥八月中旬その母も又とり殺る翌寛文十二年子正月四日より累が怨霊又きくにつきて苦しめけるを同年三月十日。祐天教化にあひて。かさね成佛し。きく一命をたすかりぬ ［死霊解脱物語 元禄三年板本］ ［新著聞集 寛延二年板本］ 等にのせて人ミな志れる事なれバくハしく志るさずにおよハぬを案るに与右衛門堀越氏之かさね実名るいと云累の字かさねと訓ずる由ゑにたゞハよびけるなり法蔵寺の過去帳に俗名るいとあるを以て訓ずるなるべきか

○芭蕉が［奥の細道］に下野の那須野にてちいさきものふたり馬の跡をしたひてはしるひとりハ小姫にて。名をかさねといふ。聞なれぬ名のやさしかりければとかきて。曾良が句に

かさねとハ八重なでしこの名なるべし

とあり。これハ累といふ名を訓にてよびしなるめ。かさねといふをおもへバ名のやさしとおもへるも元禄のころハ羽生村のかさねが事まで世にしられざりしにや

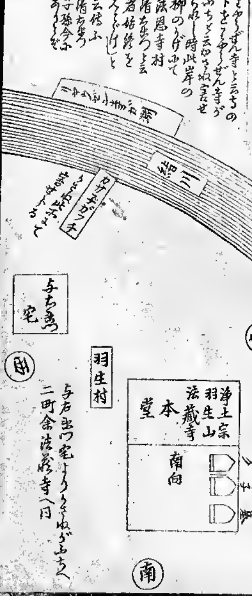
与右衛門後に剃髪して西入と云。延宝四年六月廿三日死す。其子孫今もなほ羽生村にありて。代々堀越与右衛門と名告る。当代にて西入与右衛門より五六代相続をなせり。きくハ長寿にて享保十五年戌五月三日。七十二歳にて身まかりぬ。同村羽生山法蔵寺ハ与右衛門代々の菩提寺也累助きく三人の墓あり。累助成仏得脱の絵曼陀羅あり。明顕瑞祥録と云古書二巻あり。かさね等が事跡を録せり

法蔵寺過去帳写

理屋松貞信女　俗名るい　行年三十五
正保四丁亥年八月十一日。初法名香誉妙林
單到真入童子　俗名。助三　歳○寛文十二壬子四月十九日此年号ハ助三
得脱の年之実ハ慶長十七壬子年四月十九日死
榮譽善不生妙槃信女　俗名きく　行年七十二
享保十五庚戌五月三日

以上

結川累ヶ淵図



㊇ 歌比丘尼

【残口之記】ニ歌比丘尼むかしハ脇挾し文匣ニ巻物入て地獄の絵説し血の池のけがれをいませ不産女の哀を泣する業をし年籠の戻りに烏牛王配りて。熊野権現の事觸めきたりしが。いつのほどよりか色白粉彦紅つけて付鬢帽子に帯広く成し云々　下略

【東海道名所記】万治中板本　云比丘尼ども二三人いで来て。うたをうたふ頌歌ハ聞もさけりぬぞ。丹前ぶりやつしふりありきて。たゞありくも浅ましくひきつゞりけるぞかし次ニ紫垣　明暦中　ゑやらん。又とん山の手の奴どもの踊歌あるを比丘尼節ニのせてうたふ。みづらの眉わざとくろく薄化粧して歯雪よりも白く。くろき帽子にて頭をあぢにつゝむ云々　下略。かゝれバ熊野比丘尼の風万治の比をや変りけん

累怨霊図（かさねがおんりやうのづ）

熊野比丘尼繪説圖

○【紫の一本】にめづらし町に永玄、おなか、お松、長伝などいふ名とりの比丘尼ありしよしをしるせり。是天和中のことなり。めづらし町は神田多町の古名也。此歌びくにも今はたえて名のみ残れり

⑨安楽菴落語

安楽菴策伝は、おとしばなしの上手也。元和九年七十の年【醒睡笑】といふ笑話本八冊をつくる。万治元年上本せり 此人茶道においても名高しといへども、おとしばなしは上手なることを知る人まれなり。世に称するの安楽菴の裂は此人より出ぬ

⑩露の五郎兵衛辻話

支考が【本朝文鑑】に、露の五郎兵衛が辻談義の説といふ文をのせて云、此者は夷洛に名を知られて、洛陽の仏事祭礼に彼が芝居を張ざることなし。世に云辻ばなしの元祖也。云々。延宝天和の時代の祇園真葛が原或は北野において、はなしをいふ。露がはなしといふ草紙五冊あり

享保十三年印本徽雨の梅に此図あり

延宝五年板本[かくれ笠]に

尼が耳におちくる初嵐　重高

真葛の露や質におくらん　似船

案ずるに。此句。尼が耳におちくるといふを。露の五郎兵衛が。辻ばなしにとり返して連歌師が。露といふ字を質におきしといふ事を。ふくませたり。[類柑子]に「命に似たる五郎兵衛の露」といふ句あり。是ら名をえたるを知るべし。上方のひやうばんにて江戸の志かた新ぶしをおもしろきひ之

(十一)鹿野武左衛門仕形話

元禄の頃江戸に。坐敷仕形ばなしといふ事をおこなひける。長谷川町の。鹿野武左衛門といふ者。上手也。鹿の巻筆と云笑話本五冊をあらはせり。横山町三丁目。休慶中橋。伽羅小左衛門。同所。伽羅四郎斎など。みな一すぢの名あり。貞享四年板[江戸鹿子]元禄二年板[江戸図鑑]にみえたり

(十二)大津繪考

大津絵或ハ追分絵とよぶ。いづれの時代よりかき始しにや詳ならず。元禄三年板【東海道繪図】に。大津大谷の辺。仏絵いろ〳〵あり とかけるを。又芭蕉の句に

大津絵の筆のはじめは何仏

とあれバ。元禄の頃ハ仏絵をもつぱらにかきしとおぼし【本朝俗諺志】に飛州の山中に。毛坊主といふ者あり。俗解にて。常ハ農業木樵し。人死すれば導師となりてこれを葬す。本尊ハ大津絵の十三仏なりと云々。世に傳へて。浮世又平がかきはじむるといへども。たしかなる証なし。案るに浮世又兵衛ハ越前の産。本姓ハ荒木。母の姓岩佐を冒す。時世の人物を画くによりて。時の人浮世又兵衛と称せり。世にいはゆる浮世絵ハこれにおこる歟 又平といふハ誤りなり。享保四年【傾城反魂香】といふ浄瑠璃に。土佐の末弟浮世又平重起といふ者。大津に住て絵をかきうるよしをつくれるより。妄説を傳ふるなり。或ハ別に大津又平といふ者ありて。かき始む。享保の頃まで其子孫ありしと云 事ハ定かならず。ちかごろ大津絵に。八十八歳又平久吉とかきて花押あり。前の説のごとく。大津に又平といふ者ありしを。浮世又兵衛が事にまぎらはしくて。かの浄瑠璃につくりしより。虚説を傳へしならん。さハいへど又兵衛が【本朝文鑑】に浮世又兵衛ハ大津絵の元祖なりといふ【文鑑】ハ享保三年の板なり。彼浄瑠璃より一年まへなれバ。其前よりいひ傳へしなるべしとおもへど証なし【好古日録】にかけるを。又兵衛が傳とかへるなり。

大津にて賣画をかきしけり。あるべしとかおもへども。又京の
が手筆哉をみさめて。其画風を見るに。大津絵をおなじくべき風に
あらねど。古代の大津絵を考るに。古土佐の風味ありて今に残れ
るやうにおもひしなり

○貞享四年印本[風流旅日記]に大津追分伏見の道の中略奴やり持のいきおひ
のあへ絵をうるかる大谷とかや。是ハ貞享の頃已に奴のやり持さる絵ありしを証す

（十三）辰之助鎗踊猫狂言并肖像

水木辰之助ハ。元禄中諸人に気でられし。歌舞妓の女形なり。元禄
四年に京四条より始て江戸に下り。市村竹之丞座。顔見せより四季
御所桜と云四番つゞきの狂言を興行せし。此とき辰之助が土屋主
言と云。辰之助ある姫の役にて二番目に鎗をどりの所作にて三
番目にかゝる猫の所作をせしに。江戸中こぞりて賞美し。此狂

言を見ざるをはぢとせしよし。○猫の所作の意趣ハ。ある姫の中くにて。恋志
うときを。かなしむ折也。ふ男。我実の兄あることをわすれて夫婦と成
ありて。胡蝶にならふ狂言之。兄弟のゆこの恋あるを見て。うらやみ。つひに我此世に これを辰之助がゆこの狂言とて。むかし人のちくまでも
かたりぐさにせしとぞ

[焦尾琴] 猫恋句合

凝恋

花の夢胡蝶に似たり辰之助　其角

寄舞妓恋

恋種の猫の狂言あけにけり　堤亭

辰之助にやつしけれは

[五元集]

煤掃や諸人がまねる鎗をどり　其角

これにて其頃の多なりし其節の狂言な[新版四季御所桜]といふ者四冊あり。ちと
知るべし。○円絵をどりと猫の所作の画をそのまゝにうつしにこれを
○附 に ひもをつくろふ辰之助よりそはじまりしは[歌舞妓事始]に元禄年
三年市村座において辰之助七変化の所作をして大あたりせしより七変化のはじめ也

元禄四年板古本
四季御所櫻二の巻ニ
此図あり本をうつし而て
はちやうりもふえまで
いだせり
京
川津山白藏本

同書三の巻ニ
此図あり

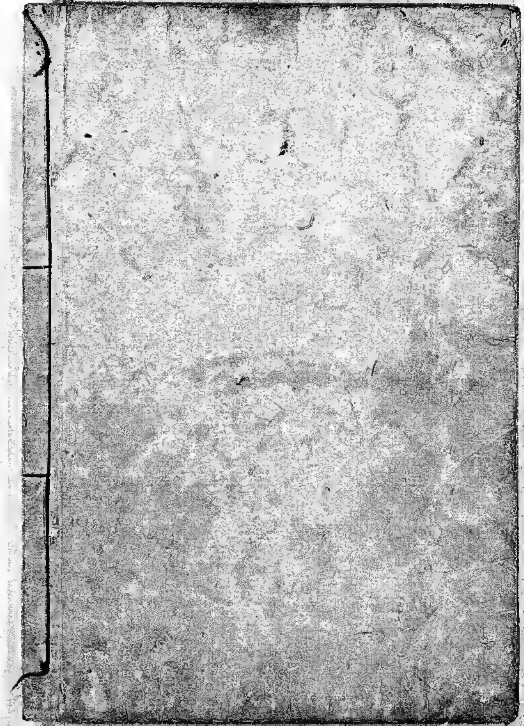
元禄十三年板本滛男評林ニ此圖アリ是スナハチ辰之助が肖像ナリ

木村太朝藏本

水木辰之助

奇跡考巻之二終

購入 本 紀元二千五百六十三年 明治三十六年十二月廿二日



近世奇跡考 三

A 00
5357

近世奇跡考巻之三

㊀古画相撲図

下にあげたるは相撲の古図。時代詳ならず。画者四明といふ人。又詳ならず。後の明鑑を俟のみ。相撲大全を案るに。山州干菜寺八幡宮再建に付。正保二年六月。下鴨會式の内。十日の間興行せし。是京都勧進相撲のはじまりなり。江戸は寛永元年。明石志賀之助寄相撲と名づけ。四谷塩町にて。晴天六日興行せし。是をはじめとす。大坂は元禄五年。袋屋伊右衛門といふ者。南堀江高木屋橋筋立花通りにて始て興行せし。

下の古図をよく見物の意にまかせてみれば。昔は神事相撲なりしをしるべし。寛永中江戸糀町にて。勧進相撲ありし事。寛永二十年印本あづま物語同年印本吾妻めぐりなどにみえたり

瀧澤文庫
東軒文庫
A00-5957
B 53125

古畫相撲圖　縮圖

右絃の上左右に此図あり一紙にをさまらざるを以て別にあらはす合せみるべし

武清所蔵

(二) 牛若木偶衣裳

家翁曰。操芝居牛若の人形。歌舞妓芝居牛若に扮する衣裳など。鳥居。玉垣。三本杉の模様を付られば。牛若と見えず。今にあらはしとあれど。其本據をしる人まれ也。昔土佐の芝居は人形を以て能を舞せ。また間に浄瑠璃を加へられるが。寛永二十年板[あづま物語]同年板[吾妻めぐり]を考るに。禰宜町に土佐が能あることを記す。こは此牛若の人形にかの模様をつけし。これ幸若のをどりもの。

烏帽子折といふものゝ文にもとづきて付たる模様のよし。予がおもふ
なりし時八十余の老人のはなしをきゝしと。家翁椿寿斎信明（寛政十一年没享年七十八）存生の日ものがたりき。家翁ハ享保七年の生なれバかの八十余の
老人ハ必ず寛永中のことをも近く見たる人なるべし。これ等の物語
をあはせかんがみとおもへバかきつけおきつ。さるころ日如の烏帽子折の
印本を得て見るに牛若のいでたちをいふ所に左のごとくあり

さるほどにひたゝれハからあやをもつて地をバ山鳩いろに一もけさつと
まいて十八五しきのいとをもつてものゝ上をかゞぬひものをありく
とぬふてゆばんでのひもつけにハ井垣鳥居社壇をぬひめてれ
ひもつけにハさけざるべきに杉を三本ぬふて云々 下略

かゝれバ家翁がいふところハぞ。右の文によりてつけたるものなるべしあきらけし。かざりのものゝ昔のものむきにはりぞところありかゞたゝえまことゞくし。

(三) 浅草並木桜并浅草寺船形手水鉢

寛永二十年印本吾妻めぐりといふ草紙二冊あり（杏園蔵本）浅草の並木に桜ありしなり。浅草寺に船のかたちの手水鉢ありしことを志るせり。いにしへをおもふべきまゝあれバ抄出して左にあらは

吾妻めぐり 下の巻に、

めぐりくて浅草の、ふるき堂ハ、これかとよ。お庵もやくつきにけり。並木の花ハかつ咲て、木の本に光りうつりましがちをかげのあるところハ、連理の枝に、桐生の松もあれぞこれをとるぐれ。よしの峯の春とても、これにハいかでまさるべき。中略 御堂にあれバ手水鉢。ちからおよばぬ大石を、船のかたちにつくりなせし。中略 きよみづちからい観世音。二世安楽をとこせへしてぶつちの御つけをあふがれ

ば獅子に牡丹に竹に虎栗にあんかう水に犀鹿に紅葉に舞
鶴に二つ君のよろひをきちんとせまで久しかれとぞ舞をするに云。下畧
加様にいへバ寛永の頃までハ駒形堂より今の並木町の辺まで浅草寺の境
内にて桜の並木ありしとおぼし。又観音堂回禄以前の荘厳なるべし

同書 上巻に

田くへいりみちたらつ田のぐるりをめにむらぶあさ草をぶちこえ
あけバわかるもなく。むさしの江戸につきにけり云々。下畧
かゝのごとくあれバ寛永の頃までハ浅草ハ江戸のうちにハ入ざりしにや。
寛永二十年より文化元年にいたりて二百六十二年におよぶ

四 吉彌結帯

延宝の頃。上村吉弥といふ歌舞妓女形の始し。帯のむすびを吉弥
むすびとて都鄙おへてもやりぬ。延宝九年印本 都風俗鑑 と云 杏園蔵本
帯のむすびハ吉弥むすびとて唐犬の耳のたるごとく二ツむすび

のあしをさがりとさぐる。帯広さハ心得尺ばかりなきことしらん。
吉弥結ハこれらと重段ひとつきハちゑしと云 是にて そのむすびやうも知れたり
○元禄四年印本 森下地 と云書て。錦の賣買する所に吉弥むすびの帯のさしにいろ西名とや云て。かの唐犬の耳のごとくたれさがるもしにあつらを入しにや

五 岡崎女郎衆

岡崎女郎衆といふ小歌ハ。寛文より元禄の頃へかけて。一節切にも三
線にも合せてもつぱらうたひたる小歌也。元禄十二年印本 紙鳶 と云
一節切の譜をつけてあるをもてさへしるしても左にあらハ
也。又寛永廿一年印本 あふむ新つくし 蜀山翁蔵本 と云草紙にもをかざきを
どうも云小歌をつくし琴に合せてうたひしよしをあるをこれによれバ
寛永の頃よりうたひし小歌既にありける小歌のうちなれ。これのみ
一百六十余年の今に残りてうたふハ愛づべし 此にあまつきてハ別に考へあれどもここにハもらしつ

▲おくさん

やり、と おかされびよろこびどろされびよろしや。やり、ひ

やり、と おかされきびよろこびはよろびよろしや。やり、ひ

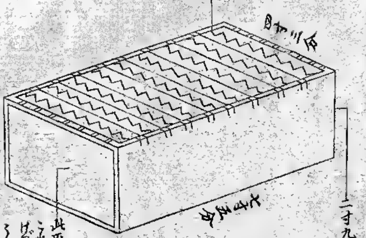
やり、と とろけきびよろこびはよびよろしや

六 古代山葵擦圖（こだいわさびおろしのづ）

古松軒記に云武州葛飾郡青戸村ハ青砥左衛門藤綱の第宅ありし所といふ往古ハ青砥村といひしをかたち中古より後に青戸にあらたむといふ 此村の農人民左衛門といふ者の家に藤綱がもちゐしと云傳ふる山葵おろしといふ

杉の四分板を以てつくる

さし竹のあつさをのこぎりのはのごとくにそぎたるを左右の板へさしこみ上より竹のふちを打てとゞめたり此竹のおろしにて大根にてもわさびにてもけづりおとせしかゞみにせしものゝ
○今も遠鄙にハ此器をもちゐるもありとぞ



此所口にて こゝより けづりたるものを うつしとるやうにせしものなり

上にあるハまて畫のごとき。古器を蔵せり。かゝる所不調法の物にて。今の世の人誰かかゝる不便なる物をもちふべき。昔人の老實なる風儀を察しらるべし。藤綱がもちゐしと云實否ハしらざれども。何にもせよ目なれざる珍しき器なりといふべしと云。又云。むかしの料理にさゝがき膾といふありて今もいはひ日にハ大根をへぎてさゝがき膾をつくる。彼器その大根をおろすものならん歟。或人云。勝武革にハかゝるのこぎり紋あるを山葵おろしと称す。彼器の形より云ひだせしならんといふ。左もあらん歟と云

⑦ 榎本其角傳

寛文元辛丑年七月十七日生る。榎本ハ母方の姓と云。本姓ハ竹下。一ニ竹内ト云 其爪菴ノ説之 父を東順と云。江州堅田人。始医を以て某侯に仕へ辞して後隱者となる。曾 和歌連歌俳諧をこのむ。由良八郎左衛門 正春を師とす 元禄六年八月廿八日没す。享年七十二。芭蕉翁伝を作る 母ハ貞享四年四月八日没す。其角幼年の時。神田おたまが池にすみ。幼名を源助 一ニ源藏ト云又とひし 其爪菴ノ説之 とぞ。蘿翁説あり 延宝のはじめ。桃青が門に入て俳諧を学びし 五元集 に入。十四五歳の時にありとあり 延宝二十歌仙 田舎の句合 等に螺舎あるひハ螺子とあり。初名なるべし。一蝶がかけの賛に螺舎其角とあれバ後にハ号にももちひし欤 晋子の原に麒角ともかけり。江戸廣子 江戸嵩鑑 等に亀鶴とあるハ誤なるべし。晋其角と称せり。又ハ 易経 に晋其角とあるにもとづけり。宝晋斎ハ米元章が硯に鐫る文字也。其硯を得て宝晋の二字。宝井晋子と云によくかなへりとて佐玄龍に扁額をかゝしめて。菴にかけ則宝晋斎と号せしよし 五元集 にみゆ。幼年より儒を寛齋先生に学び。医を草刈某に学び医道の名を順哲と云 其爪菴説なり 詩を大巓和尚に学ぶ

其角ノ昏号ハ玄竜ニ学ビ中ゴロ宝晋斎ト号スヨリ後ニ晋子ト云

書は玄龍に学て後一家の風をなし。画は一蝶に学びぬ。曽てりふり町
寶名堀木履を商ふ家のうらにすみて狂而堂と号す。貞享の比
江町 此時敬部 破笠等其角と同居せしよし [破笠自記]
嵐雪 彦右衛門 此時小川平助ト云
および古梢庭日記 [老のたのしみ] 写本 等に見ゆ。[江戸鹿子] [江戸圖鑑]
等に其角が住所堀江町とあるは則てりふり町のうち。幼年より此に
住しとおぼし。元禄三年板 [いつを昔] に居をうつしてとかきて
嵐にもやぶれあらじまん冬籠 とあれば、元禄三年の冬、てりふり町より
いづくへか転宅せしなり。[五元集]に神明町に居をしめてとかきて
行合の松もかざさずかざらり竹そあるを。考るにてりふり町より神
明町へ転宅して、あくる春の句なるらん。[皮籠摺]に六月廿日居を移
して竹三竿をうゑつけゝるに頻にねどろびゝる声ありてはか
きて句あるは元禄十一年のことなれば、元禄十一年六月廿日、神
明町を又転宅せしなるらん。[同書]に年寂が句のはしがきに晋子南溟
にうつり竹を植て有竹居と号すとあり。南溟とあれば神明町
を移宅せしも芝辺のやうにおもはるゝ。元禄十一年十二月十日池魚
の災にあひて家をやきうしなひけるよし。[焦尾琴]の序にあるはかの南溟
に居住の時なるべし。[焦尾琴]の跋を見るに 此比已に妻子あり [五元集]に類焼の比辺鄙
の居を問て一樽に雞卵をおくる人にかきて句あれば、彼芝辺に
類焼の後おなじく辺鄙に住しとおぼし。辺鄙といふはいづれのあたりや
つまびらかならず。[和漢文操]に其角が号雷柱子とあり。[ろふ]
[若葉] [類柑子] 等を見れば渉川ともいへり。又狂雷堂、六蔵菴、
善哉菴、文合菴 元禄十年 歳旦帳ニアリ 等の諸号あり。画名を著子といひ。

し八折ふふれての戯号あるべし。元禄のころ茅場町薬師堂の邊に住ぬ。類柑子に草菴の記あり そのちかきあたり植木店といふ所ふ。徂徠先生の家あり。其角が口ずさみふ。徂徠翁その咜を蘐園と号す蘐ハ茅とおなじ是茅場町ふ居住の謂なり

梅が香や隣ハ荻生惣右衛門

此句いづれの集ふも見えざれどもつたへ人口ふ残れり。實否ハ志らず。宝永四年丁亥二月晦日没ス。享年四十七。二本榎上行寺に葬る。法名喜覚居士又深川森下町長慶寺ふ墓碑あり。其角病床ふ画し。無眼の達磨一紙をうづむと類柑子ふ見ゆ。同書白櫻が其角をいさむ句のなしがきに。此所ふ年ひさしく住なれぬれバ。鎧の渡守も。袖をひくそとあれど。茅場町ふ住し時。身まかりたるなるあさらけし。宝永四年二月廿三日。春暖閑炉ふ坐ルの吟とて

鶯の暁寒しきりぎりす

そして病ふあし。ぐづかふ七日を過て。身まかりぬるよし類柑子青流が文ふ見ゆ。是其角一生の口をとぢのかぎりとあん本朝文鑑ぶ辞世ト云ハ非也

▲其角著書目録

田舎句合一 延宝八　みなし栗二 天和三　蠧集一 貞享元　新山家一 同二　續みなし栗二 同四
花つみ二 元禄三　いつを昔一 同年　雑談集二 同四　萩の露一 同六　枯尾花 同七
句兄弟三 同年　若葉合一 同九　裏若葉一 同十　錦繍段 同年　三上吟 同十三
焦尾琴三 同十四　これまき家一 時代不詳　新二百負一　類柑子三 遺稿 宝永四　五元集四 同上 延享四
新三百負一　以上二十一部

▲其角印譜 清山白石の印ハ人の見知りたれバここにもらしつ

叩両端

宝井其角

沉香亭裡

点印

越雪　五点

洞庭月　七点

一日長安花　十点

半面美人　五十点

右点印傳系○其角―秋色女
菊后亭　湖十木者菴〇寛政壬丑年六世雪団
湖十ヨリ其爪菴ニ附属ス

點印半面美人の字を彫て琴形の中に備へたるをはじめて
冠里公の万句の御巻に押印し給ふとて

春の月琴に物書はじめ哉

五元集

案るに秋色追善の集〈両三声〉一冊をみるに元禄十五年の春半面美人の印を新刻して賀會の一集成かの琴に物書の句を発句として二十五吟の百韻をつらね集冊の名を月の鶴とよびけるよし其後廿四年を過て秋色より初代湖十に譲りけるとぞ

七月十七日出生ノ証ト云

○其角画筆自記の切レ二葉を書画房主人蔵せり其文左のごとし
▲毛引ある紙に書ス

寛文丑

一ふでかしく、[illegible]としのはじめもなれ[illegible]寛文元年

七月十七日　母霊夢

人目おいてるとみてそうわくはの

数しら波れ室おふくおれ

七夜祝之　同

住吉の松そ我[illegible]

新うちそめる沖津[illegible]

卯年ヨリ堀江町ニ居住ノ証トスベシ

十歳入学　大圓寺

十四歳　於堀江町　本草綱目写

從諸　主治發明

十五歳　内経素本　易経素本写

五節之素需し　伊勢物語書之

右表紙出来本　殺ヿ触く

なし䙝義して刀　語ふ

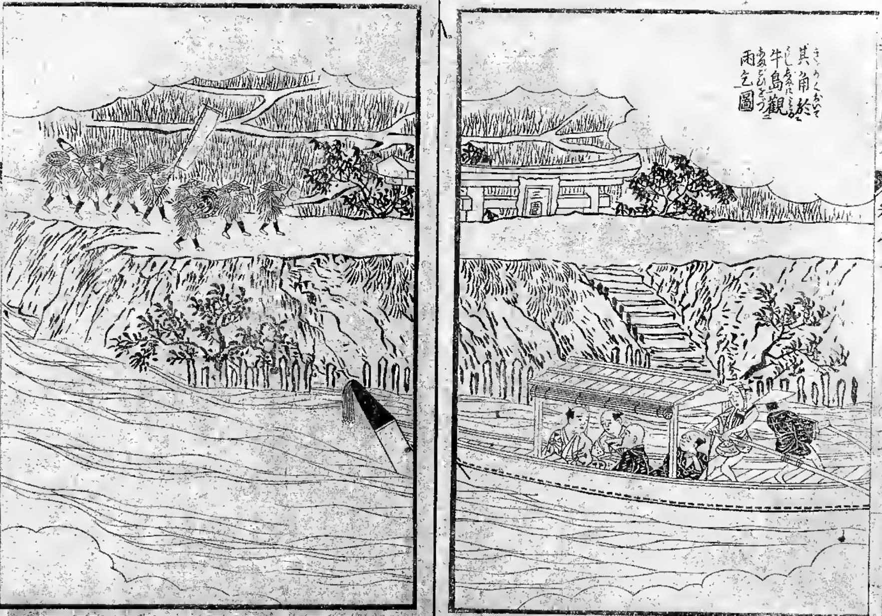
十六歳

因覚寺太巓和尚詩学易伝受

其角がうまれつきてハ此金くさくの説話あるべし然九牛が一毛をあらはして後の明鑒をまつのミ

八　其角雨乞句考

其角牛島にて雨乞する者にかはりて　五元集　夕立や田をみめぐりの神ならハとせしハいつの日なや詳ならざるによりて予三囲の社主につきてうらなしに元禄六年六月廿八日のことぞ然則其角三十三歳の時也一説に南茅場町回船問屋某俳名を白雲其角門人といふ人にいざなハれ船あそびに出て此事ありしとぞ案るに能因法師雨乞の歌に　金葉　銀河なハしろ水にせきくだせ天くだります神ならば神此歌にもとづきたる句也　五元集　に翌日雨ふるとあるを以て須臾にふりしと云説を日ごろつぶりおもひけるに元禄六年に



其角(きかく)於(おいて)牛島(うしじま)観(みる)雨乞(あまごひを)之圖

生ながら隠士【峯一堂之記】詞花堂蔵写本 ゆゑに左のごとき文あり

晋其角或年與門人同船而遊隅田川。今茲天下旱魃而田畝無水。門人等望雨乞之句。晋辞不止。故作句。須臾雨降。世人感其俳徳云々

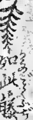
此奇特の露ばかりも、いつはりがましきすぢかきなるものにあらば、於此おもへば元禄中の人までに此事を傳へて風流の話柄となしけるを、峯一堂志じおきこるあらじ。雨の降しはいづれの日にもあれ、世こぞりて此事を語り傳ふるは、其角が名ましれたるゆゑなるべし。かの句はもとユタカとよむ折句にて、そがうへに豊作の意を以て祝しことんど。著作堂主人記

⑨ 金龍山奈良茶飯

【西鶴置土産】元禄六年板本 にはかに近年金龍山聖天町の茶屋に一人五分づゝの奈良茶を仕出しけるに、器物の綺麗さ、色々ととのへ、さりとは末々の者共勝手のよきことなり。中々上がたにもかゝる自由なしと云

【事跡合考】に云、明暦大火の後、浅草金龍山待乳山門前の茶店に始て茶飯・豆腐汁・煮染・煮豆等をそのへて奈良茶と名づけて出せしを、江戸中はしばしより金龍山のなら茶くひにゆかんとて、ことの外めづらしきことに興じけり。それよりおひおひところどころの美膳店出来しより、むかしの彼聖天の山下の奈良茶、衰微におよびたりと云 案ずるにこれ江戸にてなら茶やめしを賣るはじめなるべし

⑩ 芝神明千本櫃考

江戸芝神明の祭礼、毎年九月あり。曲物の小櫃・鮓・土生姜などを賣る。これを生姜市といへり。彼小櫃を土人ちぎびつと云。木を薄くへぎて飯櫃形に曲たるに、丹と緑青をもつて  如此藤の花の絵あり。此ちぎびつの説、さまざまありといへども、みな妄説之。案ずるに【風俗文選】吾

仲が飯鮓鈔に云。飯鮓ハいづれの時よりもてはやしけむ。此六条の名物
にハなりけん今ハおなじやけのなりものにかぞふれど。下さまの人ハ日を
限りても待べし。まして卯の花の咲ころハ此ものゝけしきも清らかなれ。藤
の花の咲時に。それが節をあはせたらん。いかなる人の深き心か侍りけん花
にて二季草の名も。世の人いふべし。器物ハ杉の香もてつけたる折に入れ
て此花をかざしおく。又ハ文など付て送るべし。かくことなじきやうなれどまたて
上ざまのもてあそびものなり。下略 かくのごとくあれバ彼ちぎびつハもと鮓を
つゝむ器にて。藤の花を画くハかざしの意
あらはすあやまりなりけし。生姜をとりても。鮓にそへてそふるものなれバなるべし。
ちぎびつと云名ハ。もと社の千本の釜木にてつくりしゆゑにあるべしひろきをこそ。
再案るに。飯鮓ハ京六条の人家にて製す。飯鮓に藤の花をそゆる
流例 黒川氏 雍州府志 巻之六土産門にもみえし

奇跡考巻之三終

購入 七
明治　年　月　日

田文

近世奇跡考　四

A 00
6257

A00-5957

瀧澤文庫

近世奇跡考巻之四

山東軒主人著

坂田文庫

一 夢市郎兵衛明石志賀之助事

市郎兵衛ハ強氣の男達。志賀之助ハ大力の相撲取にて。ともに寛永中をさかりに名だゝる者なり。おなじ頃仁王仁太夫といふ者あり。凡人にすぐれ大力にて。強力なりと知られし。其頃京都の相撲に志賀之助と仁太夫両人をめざましき。志賀之助兼て市郎兵衛と友なりし由にて。志賀之助を相撲の後見をたのみ。連だちて京に上る。東の大関ハ仁王仁太夫。西の大関ハ明石志賀之助也。已に当日にいたり。両人土俵のうちに立む時。市郎兵衛志賀之助に對していふやう。今日ハ汝一代のほまれの勝負也。もしまけなバ。おれが汝を殺し。我ハ腹きりて死ぬべし。よくよく

B 53125

夢の市郎兵衛悪輩を欺図

近世奇跡考 巻之四

心得べしといふ。さて行事團扇をひきければ。両人立むかひ。志だし
位を見合て。やと一声さけび。ふたひに組てもみあふに。市郎兵衛ハ志
むかふる目をもふさがしてつけまはる。時に仁太夫力やまさりけん。
志賀之助を引むすび。つきさしあげてあがくところを。見物の諸人手
にあせをにぎり。あはやあやふく見ゆるに。志賀之助早業の達人なれば。空
中にてひるがへり。おちさまに仁太夫が胸を蹴て。土俵のまん中にうち
ころばす。これより志賀之助。日の下相撲開山と名告ることをゆるさる。
しかるに。仁太夫その悪輩等。これを意恨におもひ。志賀之助を打
殺んとはかりしに。市郎兵衛是を聞つけて。志賀之助をば。忍びやかに江戸
を下らせ。おのれハ黒繻子の羽織の背に。明石志賀之助と金糸を以て
大文字にぬはせたるを着し。熊谷笠をまぶかにきて。ちいさ刀を
くさんの木にむすび。唯獨京都を発足す。仁太夫がその者等。此ありさまを
を見て氣おくれし。手をむなしくかへりけるとぞ。市郎兵衛
老後頭をそりて。相州田村の邊に隠遁しけるが。兄放駒の四郎兵衛
弱まりしと聞。今ハ世におもひ残すことなしとて。仏間にこもり
居て食をたち。念仏のこゑ絶て死しけるとなん 古今侠客傳に
見えたり

㊁秋色櫻并短冊

秋色ハ小網町菓子屋のむすめ。幼名をおあきといふ。十三歳の時。上野の花
見にまゐりて。清水観音堂の邊。井の端にありし。大般若といふ桜をよみて

　井のはたの桜あぶなし酒の酔

とかきつけぬ。しかりしより後。その桜を秋色桜といひけるよし 活涼が記

にん也。彼桜老木にて六十年ばかり以前はありしとぞ。案ずるに秋。貞享の比。其角の門人となる。秋色といふ。後に俳諧の判者となる。菊后亭と号す。ひとゝせ其角の点印を附属す。いつを昔にやなりけるにて。蜆うり早苗にあらぬ女哉といふ句あり。是秋色。其角に入門の時の句なるよし夢中蒼夜話にみえたり

○再案。秋色は寒玉俗称詳ならずといふ者の妻なり。男女数多の子をうめり。一男俳号を林鳥といふ。二男俳号を紫萬と云。されども俗称詳ならず。孫女を冨といへり

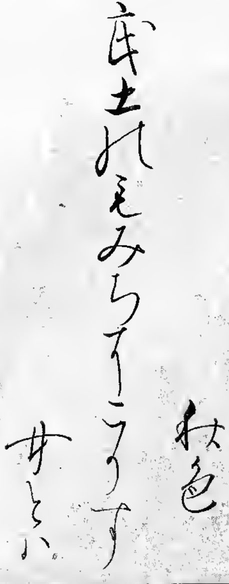
秋色享保十年乙巳四月十九日申刻身まかりぬ

辞世

見し夢のさめても色のかきつばた　秋色

以上秋色追善句集両三声といふ書に見ゆ。その書。其凡蒼主人蔵せり

秋色短冊　秋色の墨跡をあまた見れども書画房の蔵せる短冊の句をこゝに摸出す



右は御ことなき方にめされける時の口ずさみのよし秀吟なればうちつきて人の賞美せし句之

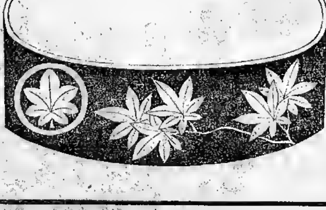
（三）高尾所置髭籠水入圖

○此器ハ今より三十とせばかりさき吉原の駿河屋魚躍といふ者方園菴得器にておくりあたへしを、ちかごろ其君にてまゐりしとなん。其君常にふるきを好めるまゝをさくらせおもひ寄して、古書画古器等をとりあつめむふついで此器をも見せむとぞ。小器さへ後の世に傳へて人のもてはやすことにて尾がおほれとしいふべし。魚躍ハ烟花清談の作者也

○表蠟色紅葉金蒔絵 紋かな貝内朱ふち金かうけ

口長さ三寸四分横二寸二分

裏ニカクノ如キ紋アリ



高一寸一分

（四）元祖團十郎傳并肖像

江戸の俳優初代市川團十郎ハ堀越重藏といふ者の子なり。慶安四年辛卯江戸に生る。重藏ハ下総國成田の産（或云佐倉幡谷村ノ産 役者大全ニ云市川村）なり。江戸にうつり住、曽任俠を好み、幡随院長兵衛・唐犬十右衛門等と交り。團十郎生れて七夜にあたる日、唐犬十右衛門、彼が幼名を海老藏とあづけたるよし。今の白猿 初名を段十郎とよび、後に團十郎に更む。曽俳諧を好み、旧徳翁才麿の門人となり、俳号を才牛といへり。延宝のはじめ、和泉太夫金平人形のあやつりを見て荒事といふことをおもひつきたるよし【俠客傳】延宝三年五月、木挽町山村座、凱歌合曽我といふ狂言に曽我五郎の役を始てつとむ。時ニ年二十五才。延宝八年、不破伴左衛門の役を始てつとむ。時ニ年三十才 衣裳の模様、雲に稲妻

のちのなきハ「稲妻のもしまでえるり不破の関をいふ句にてもとづるなるよし【江戸著聞集】にみえたり。貞享元年鳴神上人の役を始てつとむ。時に年三十四 鳴神を堕落さするの女の名を雲の絶間となづけしハ團十郎なりし。つきるよし。此筆を以て其才の秀たることをしるべし。元禄七年（イニ六年）京に上り。同十年江戸に下れり

○貞享五年役者評判記【野郎立役二町弓】といふ書に左のごとくあり

○此ころのひやうばん記ハおほく半紙本にて位付あり。元禄の末横切本となり位付あり

△市川團十郎　住所ふきや町より

此市川ハ三千世界にならびなき。好色第一の地男にて器量よきものなり。丹前のおもしろさこそいふばかりなく。せりふ天下にならびなく。おそらく此人にまさる出世あるまじ。芸者又とあるまじ。実事悪人その外何事をいたされても。おそらくなるべし。ころに学文の達者にて俳諧の道をしられしものなり。当世丹前役者の元祖。か江戸においてかくをならぶるものなし。威勢天が下にかくれなし。おそらくハ末代の役者の鏡ともなるべき人也。

市川の流れの水もいさぎよく。誇りをもりて芸者の敵にもなるべし。おもふに末代の役者の鏡ともなるべきと貞享の頃よりかきおきしハ役者の未来記ともいふべし

元祖団十郎似顔面形盃

○木がらにて大さ図のごとし
うらの方にて隠をのむやうに出来たるものなり

○面ハ白くぬりて朱のくまどりあり

○眼中ハ金箔玉眼入

○うらの方ハ黒ぬりなり

これハやんごとなき方のをさめおかるものとて友人蕙斎主人うつし来てみせし。面打のつくりなるものとみえて尤も殊勝の古物也

元祖團十郎肖像

談洲樓藏本元禄六年板本
四場居百人一首ニ此畫アリ

上ニ狂歌アリ畧之

○貞享年中印本［舞曲扇林］
▲江戸狂言作者
○玉井權八　○南瓜与惣兵衛　○宮崎傳吉　○市川團十郎
かくのごとく作者のうちにもかぞへぬ。案るに貞享元禄中の狂言は團十郎の作なるべし

○［江戸真砂］に云［寛延中写本］
元禄年。勘三郎座にて團十郎荒園の役。切り狂言に鍾馗大臣に成て、大当りせしが、その姿を見がらに鍾馗大臣團十郎とよびて、ちうすいを賣ありく。おのれ七八才のころめづらしく。五文づゝに買ぬ。それより世外の役者絵をうりいでぬと云

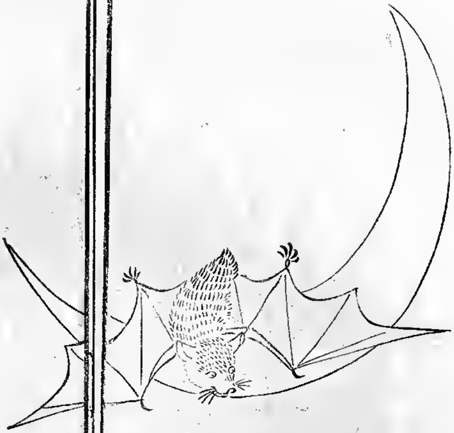
○團十郎　元禄十七年改元宝永二月十九日死。享年五十四。芝三縁山中常照院に葬る。法名門誉入室覚栄

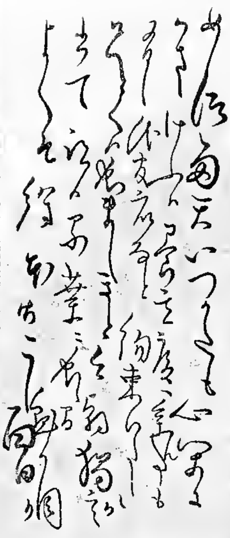
○柳塘館藏本宝永二年印本［宝永忠信物語］と云草紙五冊あり。是は團十郎一周忌追善の書なるべし。その書に云
市村竹之丞芝居。八島壇の浦の仕組忠信四番続の狂言に團十郎次信の役をつとむるうち。二月廿九日五十四才にて身まかる。幼名を弁之助といひしよし見えぬ。然則星合十二段といふ狂言の時死せしといふ説は非歟

○元祖團十郎實子。二代團十郎栢莚が傳は。あまねく人のしれる所なれば。こゝにもらしつ。今已に名跡七代におよぶは誠是俳優の名家と云べし

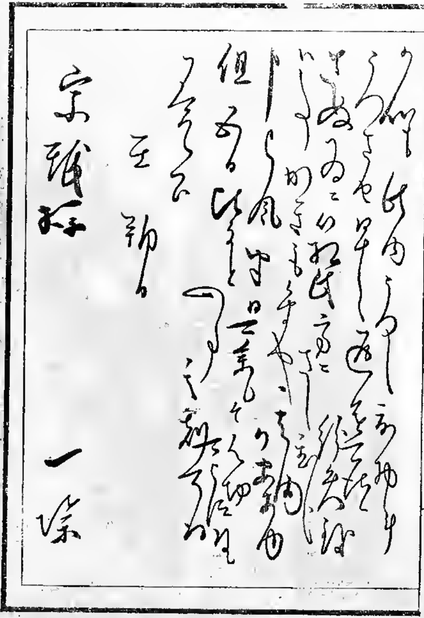
五

一蝶贈宗祇文（いつてふそうぎにおくるふみ）





近世奇跡考 巻之四



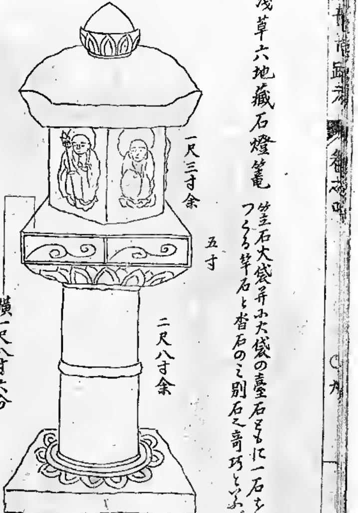
右畫中なる八なりの圖ハなりものゝ下絵之横谷宗珉翁一蝶が下絵をもつてほりものとしたりけり。人の知る所也。一蝶が手紙世におほしといへども是等ハことに珍しとなし。もとより嵩谷翁の鑒定をへて一筆のまぎれなし

㊅ 淺草六地藏石燈籠

淺草花川戸の町口に古代の石燈籠一基あり。火袋に六地藏を刻す。竿石に文字あれども磨滅して讀がたし。わづかに十月二十二日兵衛と云八字をおぼろげに見る。江戸砂子増補に、鎌田兵衛政清寄立の銘ありしよし云傳にのこれり。紫の一本に、近衛院の時左馬頭義朝、觀音淺草の飛うつり玉ふ榎を以て觀音の像をつくり立玉ふ。今に内陣にあり。臺座に鎌田兵衛政清奉行とかきつけありと云。此説によれば、彼燈籠も其節鎌田が寄立せしもの歟。燈籠の銘磨滅しぬれば推量の説のみにて決定しがたしといへども古

浅草六地蔵石燈籠

笠石大袋并ニ大袋の臺石ともに一石を以てつくる竿石と沓石のミ別石之奇巧といふべし



物とみえたるものなり。さてまた六地蔵をうつしたりとみしは古きものにて伏見の六地蔵は少納言信西の建立なり。城南竹田北向不動院の六地蔵をありける石に暦応の年号あるもあるよし。此さいはひになほあるべし。昔は石灯籠を一基そなへたるなり。今のせのごとく堂前の左右に両基たつるはいにしへはなかりしなり。洛北鞍馬の堂前尾張熱田の社前南禅寺の大石燈籠にも一基なり。彼六地蔵の燈籠一基あるも又古き証なり彼是考ふるに古物なること疑ひなし。[事跡合考]に浅草の土人が語つたへて云昔は霞ヶ関および平川町の方より観音門前馬次にてありし旅宿町なり。今存在の六地蔵石灯籠は往古よりの馬駅灯籠の立場なりなどいへり。市中にかかる古物の残りたるはめづらし。図をも上にあらはす

○或案に彼地の古老に問ふにちかごろ回禄以後年号磨滅す。其

…ハ慶安元年と云文字かきたれハさしと云。然則鎌田が寄進と云ハ。
妄説なり。慶安ハ後光厳帝の年号之。慶安元年より文化元年に
いたりて四百三十七年におよべり○山の宿に嘉暦四年の古碑もあれバ。慶
安の時代なるもあるべし

㊆ 浅草楊枝店始原

寛永の比ハ店をかまへず。ちいさき長櫃やうのものゝうちに茶筅と楊
枝をならべおきて。売けるよし。その比の者十余人。今に楊枝をあきなひ
て櫃親といふ。或云役店 これ櫃の上にて物を売さる証の。今に残れる之。今
観音堂におきて。追儺をおこなふ時鬼に扮するハ。彼櫃親等の
つとむる古例ありとぞ。以上浅草菴主人。彼ひつおやのうち古老のものゝ説なりとて。ものかたりき
○案なるに。むかしハすべて茶をのむ。もちゐるにハ。茶筅をかふ人今よりもおほかりつ
しん。あるに寛永元年より文化元年にいたり。一百八十一年のむかしなるべし

㊇ 白炭忠知

滑稽太平記を閲に。神野忠知ハ。江戸の人之俗称長三郎。後に長左衛門
と改む。承応の比。井坂春清 立圃門人 に俳諧を学ぶ

白炭やかきぬむかしの雪の枝

此句より白炭と云名をおひぬ
其角が雑談集に。白炭ときこえし忠知が

霜月やあるハなき身の影法師

辞世して腹切れるべうにせまりける浮世にハなれん哀之とあれバ。を
かりをよくせざりしや

㊈ 三浦高尾考

寛永二十年印本吾妻物語 元吉原細見記 をみるに。元吉原の時代高尾と

いふ妓女四人あり。江戸町善左衛門内高尾。同町甚左衛門内高尾。京町若三郎内高尾。同町九郎右衛門内高尾。以上みな太夫女郎にて、これら三浦の高尾にあらず。其の以前高尾といふ名妓あれば、四人までも女郎の名によぶべしともおぼえず。三浦の初代高尾は寛永の後いできたることあきらかなりけし。今杏園先生の高尾考にもとづき、古書を参考して年序をさだめ、好事家の考訂をまつのみ

初代高尾 ○元吉原の時代、引拠なきによりて、つまびらかならず

二代高尾 ○数代のうちすぐれて名妓のきこえ高し。これを万治高尾といふ。貞享板「江戸鹿子」の説を用て、二代とさだむ。万治三年十二月廿五日死、或云万治二年十二月五日死

三代高尾 ○「袖かゞみ」に高尾を評していまだ年わかければひなびたり、さきの二代高尾におとれりと。あるを以て三代とさだむ。「袖かゞみ」に年号なきをもつて時代つまびらかならずといへども、延宝四年板本「あづめ石」に高尾ありて、今ハさしひけてとあれば此高尾寛文の末の高尾なるべし

四代高尾 ○元禄四年板本「幕ぞろひ」に高尾あり。元禄七年板本「草まくら引」においつけ物わづらひより、ふるまくおくりのすこしまへまであれば、此高尾、元禄五六年の頃に出廓せしなるべし。をざりにへうるべし。天和三年の写本「紫の一もと」に、高尾は此ころ今はあらしとあれど、天和の頃は中絶なるべし

五代高尾 ○元禄十二年春出廓のよし「元正間記」にみえたり

六代高尾 ○宝永六年板本「大黒舞」に六代の高尾とあり。證とすべし。宝永七年春板一枚摺細見「大鑑」に高尾あり

七代高尾 ○引拠なきによりて、つまびらかならず

八代高尾 ○正徳三年板本「赤逢染」に高尾あり。「丸かゞみ」に正徳五年高尾いできしとあれバ、此高尾正徳四年出廓なるべし

九代高尾 ○享保五年板本「丸鏡」に、奥州がかむろあのぶといへるが、正徳五年太夫となる。これ元祖より九代目の高尾なるよしたしかなり。證とすべし。○宝永六年板本に、六代の高尾ありて、「丸鏡」に九代の高尾、正徳五年いできしとあれバ、わづか五年あまりの間に、七代八代の高尾二代ありしはいぶかし

十代高尾 ○享保十三年板本細見の図并に「両巴卮言」二本あるに高尾あり。享保十五年板本「両巴卮言」に高尾なし。此高尾享保十三十四、二代ともおなじく出廓せしにや

十一代高尾

五年の間にお廓なかりし。○九代高尾も同人のやうにおもはれども、九代高尾は正徳五年に太夫とあり。享保十三年まで年数十四年なれば同人ならずあやし。○享保十五年より同十八年までの［細見記］をあらたむべし、かならず高尾なし。此間四年中絶え

○享保十九年［細見記］三本あり。二本に高尾なし。一本［全盛鏡］といふに。高尾ありて、あげまきがかむろ、あづまや。当年十月九日。太夫となりたるよしをしるせり。又享保二十年板本［志家位名見］といふにも、あげまきがかむろ、あづまや高尾になりたるよしをしるせば、まさしく是なり。此高尾享保十九年十月九日。太夫となりしより六年を過て、寛保元年六月四日出廓せし。高尾うけ證文を今に蔵せる人あり○此後の［細見記］をあらためみるに、高尾なし。十一代おてさへあるまじくあやしけし。○宝暦五年細見［入相の花］に三浦なありて、同七年細見［花□□□］に所なし。宝暦六年家にえたり

（十）万治高尾出生地

万治年間の名妓高尾ハ。下野國下塩原塩釜村（江戸をさることおよそ四十里）の産なり。父を長助と云。子孫今にありとぞ。高尾万治中。江戸にて身まかりし時。かたみの物あまた故郷におくりしかども。ことごとく失ひて。今ハわづかの物かしらめなど只高尾みづから筆をそめて。伊勢源氏つれづれのことばを。抄書せし一軸のみ残れり。これハ彼在世の時。故郷におくるものにて。まことの手跡にうたがひなく。彼がおもかげを今見るごとくおぼゆるものとぞ　以上塩原にある湯盛といふ人にきゝてしるしつ

○筆のついでにしるせとおもふ。高尾をさゝりをあげこそいひし。三浦の岸雲ハ。信州埴科郡鼠宿の産之。事が俳諧集にくはしくしるせり

（十一）薩摩小平太

［事跡合考］ニ云。紀州の人小平太と云者。堺町薩摩（江戸に下り、中橋坐ノ始祖）の広小路。いまだ藪原なる所に。芝居を立。人形をつかはせて。諸人に見せ。是寛永年中の事也。しれ小平太が人形ハ。土偶なりしが。通四丁目に。京都より下りて。江戸中に唯一人渡世しける人形師。鶴屋ころしる者ありしに申付て。木偶人形にかへさせより

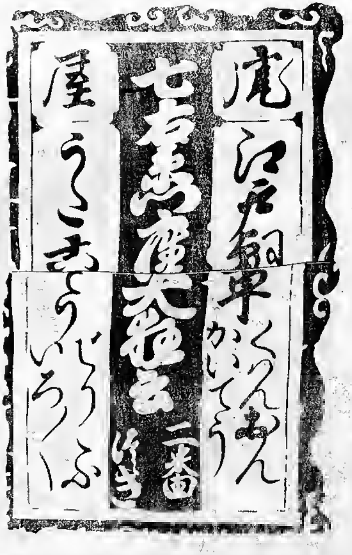
高尾揚屋入圖

小平太紙の幕を用ひしと云
其頃の質素を見るべし。

⑫ 虎屋七右衛門芝居

昔浅草寺境内に虎屋七右衛門と云歌舞妓芝居ありしよし。そのころの狂言をどり小歌せりふをかきたる板木を松蘿館主人得て硯箱につくれり。年号なきゆへ時代つまびらかならず。案ずるに貞享四年浅草観音開帳ありしそのころのものか

その板木ヲ摺うつして左にあらはすなり。小歌せりふ或ハ狂言の絵などあれども。板磨滅して分明ならず。よりて略しぬ



松蘿館所蔵

(十三)英一蝶大津絵讃(おほつゑのさん) 縮図(しゆくづ)

此絵ハ一蝶が筆にあらず
凡の大津絵に一蝶
賛辞をのせ
かきつけるなく

山東軒所蔵

右絵の上に左の如く賛辞あり

大津絵ヿ
何ろうん
花の
流之

英一蝶讃

(十四) 浮世又兵衛江口君圖

紙中長二尺七寸五分横一尺五分
縮圖シテアラハス
山東軒清凱

(十五) 大高子葉烟管筒

下に圖をあらはせる。烟管筒ハ、大高源五常におびる所の物なり。京師にありし時、それに俳諧の句をかきつけて、小野寺氏の僕久右衛門と云者にあたふ。久右衛門後に金粉を以て、これを修飾しけるよし。京四条室町河津氏これを得て秘蔵しけるを、予が好古の癖あるをきゝて、これを出だせる。別に傳系の書ありといへども、こゝにハ畧しつ

案るに、大高氏俳諧を水間沾徳の門に学びて、秀吟おほし。沾徳が[文蓬萊]其角が[焦尾琴][類柑子]等に其句あまた見ゆ。沾徳初号を沾葉といふ。ゆゑに大高氏の俳名を子葉といへり。冨森春帆、神崎竹平等おなじ門人なり

子葉烟管筒圖

胡麻竹長八寸五分メグリ三寸五分

山東軒所蔵

(十六) 深見十左衛門傳

深見十左衛門。本姓ハ深溝。名ハ負國と云。寛文の頃。江戸に六方男達といふもの。あまたありし。其徒のかしらとして強をくじき。弱をたすけ。人の危急を見て。すくハずといふ事なし。曽て俳諧をたしなむ。延宝年中。難波の梅翁宗因。江戸に下りし頃。其門に学ぶ。一時の句に

名月やきてみよかしの額際

身のたけ[illegible]男なりしが。額ハひろくぬきあげたれバ。此句ありとぞ。頃の小歌に。額のほんの前から見えぬを。来てみよかしの工とうたひけるよし。天和の頃。[illegible]ありて讁せられし。翌年春の句に

梅ちれや花橘ハかぐ[illegible]

此句吉兆となる。廿八年を過て。宝永中帰郷す。老年におよびてや。

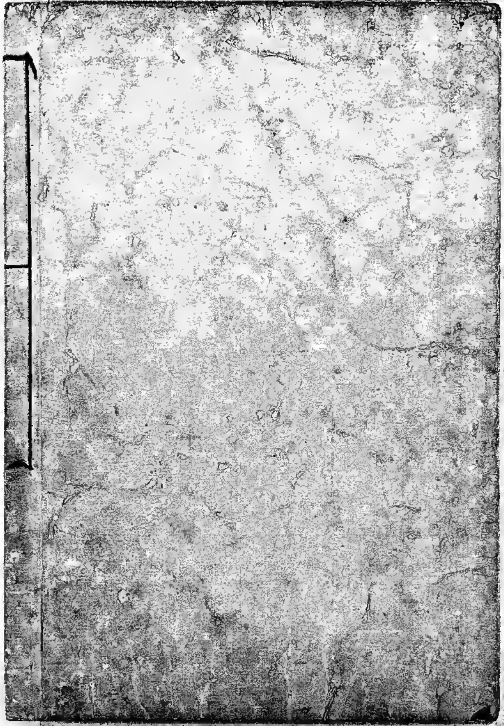
二尺四五寸の朱鞘の大服差をさしたりとぞ。形容年より若く見えて。筋力壮年の者に増りしとぞ。つひに剃髪して自休と称す。菩提所本郷丹町。龍光寺のうちに庵をむすびて住ぬ。享保十五年三月十八日没す。享年九十歳。龍光寺に墓碑あり。一應院心溪自休庵主墓とあるを。傳へて云ふ。在世の若かりし時。人と打あひむかふ歯を二枚かきけるが。金を以て入歯をつくり入しとぞ

以上古今俠客傳洞房語園の説に予が考へをくはへて。かきつけつ。髭の意休実ハ此人のよし

奇跡考巻之四終

購入 七本 紀 明治三十六年十二月廿二日

文庫



幽冥奇縁考　五

A 00
6357

龍澤文庫

英一蝶が杜年面川度まうえうる傳鐵社して西を学とえずも云下月傳ひえりしもをのあり下谷の郷るあつとはひみの最に両官律師の說も

近世奇跡考巻之五

山東京傳 著

南葵文庫

㊀ 英一蝶傳

諸書にのせたる所誤もくありとぞ見ゆ。且もらせる事おほし。案るに一蝶承應元年摂州に生る。父を多賀伯菴と云某侯の侍医也。一蝶寛文六年十五歳の時江戸に下り狩野安信を師とし姓は藤原多賀氏名は信香。一に安雄幼名を猪三郎と云後に吹右衛門とあらため又内或は助之進 望海毎談 剃髪して朝湖と称し翠蓑翁牛丸暁雲堂舊草堂一蜂閑人隠門人一閑散人隣樵菴鄰濤菴北窓翁等の諸号あり書を佐玄龍に学びて後一家の風をかきて書名あり俳諧を芭蕉に学び其角嵐雪等と交り

A00-5957

B 53125

ふりし俳号を暁雲又和央［洞房語園］と云。元禄十一年十二月（元禄八年トスルハ非ナリ）呉服町一丁目新道に住し時故ありて謫せらるゝ時に年四十七。謫居にある事十二年。宝永六年九月（宝永四年トスルハ非ナリ）帰郷して後英一蝶と称し北窓翁と号し深川長澪町に住ぬ［人物志］

享保九年甲辰正月十三日病て没す。享年七十三。二本榎承教寺日蓮宗塔中顕乗院に葬る。法名英受院一蝶日意

辞世　まきらかすうき世の業の色どりもありとや月の薄墨の空

○英一蝶
- 男　一蝶　名信勝　俗称長八
- 次男　一蜩　俗称百松又猶内　一説ニ号孤雲
- 一舟　門人養子続師家　名信種号東窓翁　俗称弥三郎　明和五年正月廿七日没

嵐雪［玄の袋］花に来てあはせはあけの盛哉　暁雲

朝寐して桜にとられ四日の雛　同

［温故集］戸塚にて
此みぎりひかり鎌倉ながら堅魚　同

此余画讃の文或ハ句あまたあり記しつくすべからず

○深川霊巌寺の後海辺新田に宜雲寺といふ禅院あり。一蝶帰郷して後志ありて此寺に住けるよし。寺中の絵障子のたぐひ。すべて一蝶が筆也。因て世人一蝶寺と云。其絵ちかごろの回禄にやけうせしとぞ。

○一蝶の母剃髪して妙寿と云。一蝶謫居にある時。友人横谷宗珉の家にやしなはる。一蝶帰郷して後六年を過て。正徳四年三月晦日没せり。

(二) 朝妻船讃考

朝妻船讃　隆達がやぶれ菅笠しめ緒のかつらながく

便りぬ題しらずはあふみのや
あだしあだ波よせてはかへる浪朝妻船の浅ましやあゝまたの
日は誰に契をかはして色を枕はづかし偽りがちなる我とこ
の山よし夫とても世の中
北窓翁一蝶画讃

右の文世にうつし傳ふるにあやまりあり今柳塘館
不蔵の正筆を以てうつし出ス

一蝶若かりし時友なる人都よりのつとにとて世足軒通勝卿船中遊
女といふ題にて「いかなれる朝妻舟のあさからぬ契をたれにかはす
らんとかける短冊を得させしをよろこびて秘蔵
せしが、ある年近江の彦根にてこゝかしこ名所をめぐりけるうち
に朝妻(近江國坂田郡)の古跡に目をとまり通勝卿の詠歌をおもひいでし
て懐旧のあまりやがてかの朝妻舟の絵をゑがき、且朝妻舟とい
ふ小歌をつくりけるとなん。其角が句に「柳にハ鼓もうたず歌もなし
五元集にあり。おもふに是も一蝶が絵の讃なるべし。其後某侯の
まへに陪して、市川検校(神田かぢ町)が琴に合せて一蝶うたひ、これをう
たひけるとぞ。かの朝妻舟の絵につきてハあらぬことゞもを云傳ふる
といへども、さまざまのそら言也。人の見知るところ船のうちなる女の烏
帽子水干着たるかたをバ、一蝶晩年にかきたり。始ハ只小舟のうちに
烏帽子でみあたまうちかけたる女をかきけるとぞ
以上一條がおもむきをくむ某の翁其の師某のかたりつたへたることにて、さらに筆
記する説あり。此説あきらかなりとて且しるしおくなり。これにつきていさゝ
か事がらはゑを下にあぐはさ○案ずるに通勝卿の歌にもはやしのことにあらそ

六百番哥合　寄遊女恋　後京極摂政
誰となくよせてはかへる浪枕うきたる舟のぬしもさだめず
新續題林　雜下　岸頭傀儡　實蔭卿
あだ浪の枕さだめぬ舟にしも誰とはなれよるべ陸の宿

題等の歌にもおもひよりけん。鳥籠山は近江の名所也。おなじく床にかけて歌によむ。由縁にいつはりがちなる。我とこの山をかけたらん。元禄のころまでは。隆達ぶし残りたれば。一蝶声よくてこれをうたひ。且小歌の文をも作る。あまたつくれる中に。朝妻舟。しのゝめ一名や。はやり草といふは。ことに世に行れて。其ころのたれかれも唱ふ。もてはやしうたひし小歌也。由縁に元禄十六年印本[松の葉]といふ音曲本に。朝妻舟の文を。端歌の部にのせて。四段あり。其文左のごとし

あさつま舟

あだしあだなみよせてはかへる浪。あさづまぶねのあさましや。あゝまたの日はたれにちぎりをかはして。いろをまくら。はづかしや。いつはりがちなるわがとこの山。よしそれとてもよの中

おなじく

くきのつとめのまつちん山の風。ゆふこえくれてさとまでかよふ。あゝかなあやにくにかよふ波友。ちぎりくまえぬおもかひに月日をおくるものぞ人ごゝろ。あふまでのつらさ

おなじく

あだしあだなる身はうきねで。あふぐぬれごのとこのつま。あいくらびひそでにあまれるなみだのいろを。あかねさすものいろぞ。このもみぢむ。ひとりこがれてまつぞのながめ。ありあけの人のつれなし

おなじく

うきをかこん友さへなくて。ながきあかねつらき心。あくるてあやをざしつる人のその水ぐきれ。ぐろみしあだをとこにつれなされ。やまぶきなるをゆかりめなす。あわれとてもとくるし

右の文を案るに。隆達が小歌の調になぞらひて作れるもの也。右の小歌世におこなはれたる由縁に。はじめの一段をかきて。絵をそへたるならん。一蝶自作の四季絵跋といふものに。「若かりし時。あだしあだ波のよるべにまよひ。時雨朝がへりのまばゆきをもつゝまざるころなればと。かけるも。かの小歌をいひて。あそびがもとに通ひし。若ざかりをおもひいでゝの文なるべし

○もし絵をそへたる時。別につくりたるものとおぼえて。寛文十二年印本[糸竹初心集]にのせたる小歌に

▲なげ笠ぶし

やぶれなげがさ。やんや。なあをかくされてへの。おなへ。さよにさもせぬで。なへいさんさ。やあさんさ。さてもせぬ

かくあるハ隆達ぶしのふるき也。寛文のころ三味線にも一節切にも合せてうたひしふしなり。かのなげがさに○隆達がやぶれなげ笠。なあをかくさのふしをつぎ持りぬとかきたるハ右のなげかさぶしのなくつくりたることをいへるなり。なげ笠ハあふみの名産なるによりて。これをふみくれハあふさのやさハつゞけたるならんか。又このころ泉州堺に住し小哥の名人也。其傳ハ小哥蘆葉集につまびらかなり。隆達作の小哥ハおほく花都といふ歌人ぶしを付たり。あつめしよしなれども。[松の葉]に武州花都作とあり。これハ一節をせしゆゑ之を作りたるにあらずや。再案之[焦尾琴]にあさづま船に鼓を入て月をみる女の水干に扇かざしたる絵にかきて

おもふまゝあげぶしハこれ月人船　其角

　　かれらも一説の数の讃なるべし

(三) 笠懸讃考

ちかごろ　イニ。往事夢に似たりとあるか。ある日螺舎其角と共に。深川なる芭蕉菴におもむきて夕に帰る途中の吟

まちがひあげのちがふがあげてゆるらん

螺子 此句にむすんで

身をうたのめとわらひきる世に

熒星くほりかさ見。芭蕉もやぶれ。螺舎もなげかさるゝに。我のみ残る深川の。今日わもへでけりとざる世や　以上

案ずるに貞享中。一蝶多賀朝湖といひて呉服町一丁目新道に居住。年三十五六才。其角ハ堀江町に居住。年廿六七才の時。高人芭蕉菴にうりて。うたゝ舟の口まさみあり。[夢中菴夜話]に見えたり。なせ銭もやぶれ螺舎もなげかさるゝに。象のそのころ深川にかきたるハ。一蝶晩年。深川长町に居住の時。懐旧のこゝろをのべたるなるらん

○右讃に六十九翁一蝶とかきたるあり。元享保五年にあたれり

(四) 助六狂言考

諸説皆虚妄なり。延享中板本[栢莚一代記]をみるに。正徳三年四月。木挽町山村座において。栢莚（二代目團十郎）はじめて此狂言をせし時に年

廿六花屋形愛護櫻と云。狂言の二番目に。江戸半太夫浄瑠璃にて。白酒賣新左衛門ハ荒木左衛門に扮する者。いく志ま集田烟之助。後に花川戸助六に扮する者。市川團十郎。傾城總角に扮する者。玉沢林弥なり。これ津打半右衛門がつくれる狂言也。此前上ミ方にて万屋助六傾城總角二代紙子と云。浄瑠璃あり。正徳中。三浦屋の總角。名妓のきこえありし因に。かの浄瑠璃にもとづきて作れるなり。狂言中に紙子の事あるハ。二代紙子といふ外題のゆゑをのこせる。作者の意趣なるべし。扨花川戸（貞享江戸絵図舟川戸とある古名歟）の助六といふは。浅草三谷の侠者にて。さしてことある所行もなき者なれども。これもかの万屋助六と同名なるをもつて。三浦の總角に對して。其名をかりもちひたるものなり。彼三谷の助六名ありし後。因州日照山易行院と云。浄土宗の寺に葬りしよし（易行院ハもと北ところのさつまやぶの内と云所にあり。それのこと〳〵ぞ魁文翁の説）鬚の意休がことハ。「洞房語園」の鬚尽しの文に鬚の達人ハ。そろべしに関羽日本に朝比奈宗祇。女郎買に無休ありとあり云。鬚の無休と云ハ。元禄中の幇間なり。すと云ハ深見十左衛門自休が事なるべし。此人額おほきくぬきて頬鬚あり。鬚の十左もいひけり。名ハ鬚の無休を翻用し。住業ハ深見十左衛門入道自休がことをとり用ひ。合して以て鬚の意休とハなせるなるべし。又「江戸鹿子」をみるに北八町堀藤屋清左衛門と云者朝顔といふ煎餅を賣る。これの名品なる由名に。彰せん平といふ名ハあらけるなり。其後正徳六年正月。堺町中村座において式例和曽我の二番目に稲荷延ふくびかの狂言をまで。これを和助六と云助六の扮作ハツハ鮫鞘一ツ印籠。これハ其頃流行の物之。明暦寛文の

正徳二年始て助六の狂言をせし時の絵なりとぞ
是ハ中村座にて助五郎清春の筆之

此時ハいまだ一ト幕にて屋上によびて狂言あり
今ハ二番め上方の狂言を後に用ひし也

昔の歌舞妓狂言の古畫を見るに若衆形の惣踊あるにならべて紫
の帽子をかけさせたり。江戸鹿子云。むかしハ美童に綾羅をきせま
とし紫のぼうしをかけさせて。いろ〳〵の藝をならはさしむ。助六がて
ちまきも其遺風なるべし　かゝる事にやありけん。今にいたりて人々のもてはやす事

(五) 十寸見河東傳

本姓ハ伊藤。十寸見藏と号す。世に以て氏とす。俗に河部屋藤左衛
と称る者なり。河東と云。江戸品川町の家に住せ。世に知られる。酒
をこのみ遊嬉し。つひに産を破りて半太夫梁雲の門に浄瑠璃
曲を学び。つひに一家を起して出藍のほまれあり。享保十年乙巳
七月二十日病を以て没す。享年四十二。築地本願寺塔中成勝
寺に葬る。棺を送りて寺にいたる者。千を以てかぞふ。門人夕丈を

養ひて家をつがしむ。二代の美を起して家声をおとさず。其あと今
にたえずして。河東節と称す。江戸の名物とす。牛島長命寺にも
河東代々の墓あり。元祖の法名清西とあり。以上成勝寺の墓碑の文
によりて考へをくはへてあらはす

［袖かゞみ］といふ浄瑠璃本のおくに

引よせて勝つ下の柳哉　河東

- 江戸浄瑠璃太夫始祖 ○薩摩浄雲 正保ノ頃ノ人○次郎右衛門入道
  - 門人 長門太夫
  - 門人 肥前太夫 延宝ノ頃ノ人○元大坂町住 肥前ブシノ祖
  - 門人 半太夫 貞享元禄中人 初名半之丞 堺町アヤツリ芝居座元 薩摩ニテ坂本梁雲ト云 甚左衛門町ニ住
    - 門人 河東
      - 夕丈 門人養子
      - 河丈

（六）竹婦人傳

享保の頃。浅草竹門に住し。俳諧師。岩本乾什。河東と志たしく交り。河東節の文をあまたつくれり。竹婦人作とあるハ。皆乾什が文也

○繪蓬莱　○淀む瀬　まだ茂が為につくれるとぞ　○いの字扇　享保十九年訥子が為に作る

○江の島　○禿万歳　○有馬筆　○水調子　玉菊追善

○花かたみ　河東追善　此余あまたあるべし

乾什ハ。貫志沾洲の門人にて。初名を呉丈といふ。千歳児とも号せ。

宝暦九年二月十七日没ス

浅草寺境内。人丸社の前に辞世の句をきざミし碑あり

辞世　雪解や八十年のつくりもの

（七）万字屋玉菊傳

吉原の盆灯籠ハ。角町中万字屋勘兵衛が抱の名妓。玉菊より

おこれるすハ。これを知れる事にて。めづらしからざれバ。更にいふべくもあらず。玉菊ハ正徳中。七月のなかば。身まかりしよしを傳ふるハ妄説也。享保十三年印本【袖草紙】玉菊追善句集といふものを。案ずるに享保十一年三月廿九日身まかりぬ。光感寺といふに葬るよし。そのころゑんある者志たひしかれバ。始て灯籠をともせしも。享保元年といふハ妄説也。玉菊死せし享保十一年七月新盆の節。新霊を祭るため。中の町俵屋虎文揚屋町松屋八兵衛等発起せしよし。すなハち其一周忌に七月死せしといふ人なかりし。竹婦人玉菊追善の浄瑠璃水調子を作りしハ。享保十三年三回忌の時也。西念に二まり三まり年を重ねてといふ文あり。玉菊曽河東曲の三絃をよくひきし由なるに。十寸見蘭洲 江戸町二丁目つるつや庄二郎 これよりかぞ。かの浄瑠璃を作らしむ。おなじ時乾什かの袖草紙

をあげハそつむ菊日ごろ大酒を好みつひに酒にやぶれ卅五才にて
死せしとかや。かの句集に酒のすきなる人によする句おほかれバさもあらん。
水調子の文に。その酔ざめの夢の世にかけるかも。その曲ろし老を主
げこのなぶるふ鏡のいへに橘の葉をいろどる。玉菊がもとむなるらふ。
これらのうたハ水調子の文を証とすべし

㊇ 玉菊拳のはなし

享保中酒を好む者。拳相撲といふことをしておこなふ。玉
菊そのわざを上手なりしよし。新吉原小田原屋某。玉菊がもとめ
わひし。拳すまふといふものを。今にそのむ甲かけと云もののごとく。
黒天鵞絨にてつくり。金糸にて かくのごとき紋をぬひ。
是かの拳相撲にもちゐたる。よしおほひありとぞ

㊈ 腕の喜三郎

晋子其角云。中古野出の喜三郎と云者。片腕をきられ骨に皮
引かゝりてありしかバ。自らかしきを鋸にて肘のかゝりを引きりて捨たり。
宗門にあつて。片枝と号す。[五元集] 鶏合の巻に見ゆ。寛
文中の侠者腕の喜三郎といひしハ是なるらん

㊉ 鎌田又八

伊勢松坂の産にて。江戸本町に住し町人鎌田又八と云者。世に希
有の大力也。[新著聞集] 寛延二年板本 にいふ。鎌田又八江戸にありし時。幅一間
におよぶ三尺の戸棚をこしらへ。ふとき緒綱を。一握ある樫の棒を
そへおきしが。明暦三年の回禄の時。そこへの戸棚に緒をかけて
につめ物いれし葛籠二ツを一ツへにゆひつけ。連著にてせおひ。樫

の棒をつき。そのさまさけにあまるものあれバ。左右へ投やりて。群集をわけさけ車長持のうへをふみ越て。浅草にのがれ去しをみるせり。此一事を以て強力のほどおしてしるべし

浅草観音仏殿の柱に。又八がおよびの跡ありと伝ふる。今ハ不分明なれどあり。寳八柱に。ものゝあたりて。自然にくぼところもあるべけれど。又八が大力のきこえありし世に。ふとおもひよせしより。ふるき伝へとなれし

(十一) 加賀千代尼傳

千代ハ加賀松任駅金沢ヨリ洛ノ方ヘ四里去 福増屋六兵衛と云者の女也。いときなき時より。風雅の志あり。一時俳諧の句をきゝしを。父母聞てさぞかりの志ありけるとて。行脚の俳人一説支考門人廬元坊ト云を家にとゞめて。学バせけり。纔十八歳の時。金沢の福岡某が家に嫁ぐ。其後夫身まかりければ。松任にかへり。父の家にありて。ますます俳諧をこのみ廿三歳の

時京にのぼり埒州にいたりて蔡衣舎乙由の門人となれり。廿七歳の
時再上京をし。後頭をそりて素園といふ。容良美にして言語
少く。常に閑寂を好む。画をもよくせり。松任ハ京へゆきゝの要路なれバ日
毎に諸国の旅客に交り。ゆきゝもありしに應じて。書画をあたへけるゆゑ
に。其名海内にきこえけるとぞ

安永四年九月八日寂す享年七十四辞世

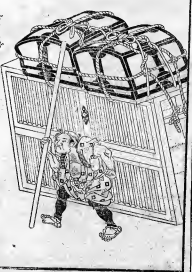
月も見て我ハ此世をかしく哉

金沢専光寺一向宗に葬る。又松任駅聖興寺に碑を立て。辞世の句を
剋む 以上 千代尼の一族松任駅村井屋小十郎ものがたりき

○千代若吟あり。頃のものちぎりの句おほくて人のまねてえつの句。百あまりの句
のまぎれ人口にあれバ。こゝにはもらしつ

○一説に千代北越の呉俊明に絵を学ぶといふ。予これをきゝ。俊明の孫李渓
翁主人に尋ねてたゞしにも。その説なきよしなりといひき

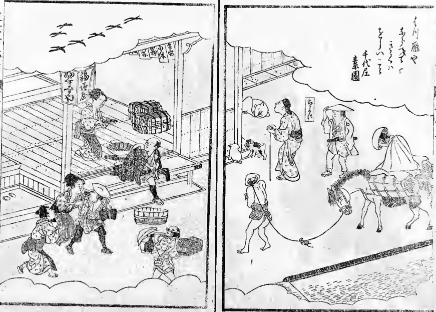
鎌田又八強力圖



○又一書に「ありくさりく」とてあけにけりといふを。千代が初学の句ありといふは誤なるべし。ありくさりくとて寐入りけりといふ伊勢の涼菟が名句あり

㊁ 大橋柳町考

慶長の頃までは。江戸の傾城町処さだまらず。所々にありしうち。麹町八丁目。鎌倉川岸。大橋のうち柳町にあり。大橋は今の常盤橋の古名也。柳町は今の道三川岸の辺なりと云。是普通の説也。案るに【事跡合考】云。今の京橋具足町の東。葦沼の汐入を築立て。傾城町とせし。其地取丸くし。一方口にして。南の片側をすミ町。北の片側を柳町と名づけ。中一筋の通りを。中の町と名づくと云々。是奇説也。此説によれば。慶長の比の傾城町は。京橋の柳町歟。今猶京橋の北具足町にすミて。柳町すミ町あり。両町背を合せたる町也。（すミ町は。町のすミにある故に名づく歟。今は炭町とかく。竹町とも云。竹屋ありし）享保五年写本の【洞房語園】に。吉原の角町は。京橋角町の傾城屋ども。此町にうつり住し故に。名づくとあれば。京橋に傾城町ありしことあきらけし。具足町柳町の間の通りを。すべて今に中通りと云も。昔中の町といひし名残歟。「爰の辻」のかどうのふちもと柳。風にふかれてござるへあびこ。小歌にうたひ。町の入口に大樹の柳二株ありしと云。旧跡は。京橋の柳町也。大橋柳町と一口にいひ伝へたれど。大橋（今常盤橋ト云）と柳町（京橋ノ北）とは。別所なるを知るべし。其後元和年中。今云大門通りに。一廓を築き。元吉原のすゑ。麹町。鎌倉川岸。大橋。柳町。角町の者ども。すべて一所にあつまりけるうち。柳町の者は。江戸町二丁目にうつる。故に此町を本柳町ともいふ篇


千代尼
素園
ちよ

町の者のつけしハ其後角町と名づけたるよし。これも写本［洞房語園］の説なり。江戸町二丁目を本柳丁とかきたる沽券

○因に云、角町に仕立股引といふハもと京橋の角町にて仕立しゆゑに名づく。今はあやまりて又此名を股引を軒にかざしてありぬ

（十三）地黄坊樽次酒戦

慶安の頃、江戸大塚に地黄坊樽次と云人あり。實名茨木春朔、古今某侯の侍医也。希有の大酒にて酒友門人甚おほく、其名高き人也。又狂歌をよみぬ。或云鶏声が窪に居住のよし。小石川柳町祥雲寺に樽次の石碑あり。正面に不動の像をきざみ、右ニ酒徳院酔翁樽枕居士とあり。左りに辞世二首あり

これ人のたこそかゝれ死出の山打越えれば　われはふもとを

南無三ぼう　あまたの樽を呑ほして　身ハあきだるに　かへるふるさと

臺石に延宝八庚申正月八日とあり。［沾涼説］て樽次の遺骨を葬しハ谷中三崎妙林寺也。樽次寶の法名ハ信善院日宗と云。祥雲寺の碑ハ酒門の高弟菅佳口と云者建しとぞ

○おなじ頃武州大師川原に大蛇丸底深と云冨農あり。樽次におとらざる大酒にて酒友門人おほく、名高き人也。其子孫今に栄ふ

［續さるみの］その蔓や西瓜上戸の花の種　大師川原に於て樽次と云ものゝ孫に逢て　沾圃

○又おなじ頃鎌倉に甚鉄坊常赤と云者ありしが、もとハ真言宗の僧なりしが還俗し、樽次に医を学びて業とせし。樽次底深につぐところの大酒也

○酒戦［洞房語園］に、江戸吉原の医師縣升見と云者、浅草ニ原に目蓮……慶安の頃大師川原にて樽次底深酒戦ありし、其時樽次方の大将として……水鳥記に見えたり

續猿みのに樽次とあるハ底深ト詠トあやまりうつしたる歟

蜂龍盃圖（はちりうのさかづきのづ）

予いまだ大師川原にある盃をみざりしに友人木村太朝がもてる平砂が絵をうつしてこゝにあらはす絵の上に賛詞あり左の如し

大塚乃大酒官地黄坊樽次
二子有り弟を次郎長太郎
よりよく此あととして家に伝ふ
除蜂龍と云へる盃を此度凉
と
記

酒にても
子を見ばこそや
花能財
呆花林
平砂書并跋

酒戦の圖
ちんてう
たるつぐ

〇蜂龍盃 これハ酒戦に用ゐる七合入の大盃之蜂と龍との蒔絵なり もさせのみのふ着をとるむよふところまで蒸汝子弟大師川原の其氏今に蔵せり

〇水鳥記 二巻あり樽次の自作ハ底次と酒合戦の戯書なり原本大師川原にあり世に流布の印本二本あり一本ハ寛文一年京板一本ハ江戸板上本の年号なしこハ後人のかきたる本也

卋 鹿蔵猿次郎

貞享中の印本[舞曲扇林]二冊河原崎権之助作 云草紙に六方とハ佐渡島歌舞伎乃時名護屋山左が下人に鹿蔵猿次郎とて両人あり。山左を六條傾城町に行かよふ時供しけるが鹿蔵ハ生れつき奴にて座敷に出てもあふけあききすをひて興あり。猿次郎ハ自然とをのしき男ぶりにてものいひさるさ笑をもよふせり。佐渡島歌舞伎の時奴を[羅山文集]を考て三左被人を役者として佐渡島にくしたる 寛永十九年

鹿蔵ではじめけるより鹿方とも云。六方も六法も誤りにや。猿次郎ハ今の戯遊これハ狂言のせりふに私ハ今日の猿馬鹿でござるといひて笑せけり。後ハ猿若といひならはせり。かの鹿方ハ多門庄左衛門延宝の頃より奴の風俗よくありて。袴を着し供奴つれてでしけるより。鹿方ありふれけり。これよりまへハ紺のぐいぬにて鬚をくけなしおてはしけるこそ 案に坊主小兵衛なりしもこれをまなびたり。今奴丹前といへり云々

遺ゆる 猿次郎より後に猿若といふものハ猿若三作。江戸にてハ中村大勘三郎彦作之云 以上 鹿方猿若の説ハ信じがたしといへども鹿前猿次郎のをさす。奇説なれバここにかきつけおきぬ。

[雍州府志]云其称猿若者三左衛門所毎赴之娼家奴隷男有猿者。性魯鈍而不通人情。三左衛門常玩之至今有狂言猿若。是皆所仮為猿若者也 云々 右にいふ三左衛門といふハ名古屋山三の事にて此説前の[舞曲扇林]の説に似たり。[雍州府志]ハ天和中の書なれバすこしふるきを信べきにや

奇跡考巻之五終

醒々齋主人奇跡考成携来謂余曰
有古図者自摹之其無圖者不遑
運思弄毫遂以新図託余然枉毫
恐汚楮面辞之不可不得已展閲其
書想像其事跡猥圖己之意以塞
其責耳覧者恕諸

甲子秋日

可菴源武清誌

[illegible]

甲子桂月　葉洲東秋題

醒醒齋山東先生著

○近世奇跡考後編　全部五巻嗣出

全著

○新因果物語　繪入　全部七巻嗣出

善人ハ始凶ありといへども皇天の憐をかうふりて終吉あり悪人ハ始吉ありといへども皇天の罰をうけて終凶あり善報悪報遅速ありといへどもかならず報あり天理彰々として毫釐もたがはざる因果覿面の理を十五回に録したる奇談あり寛永中石平道人の著述に因果物語といふ書ありゆゑに此書を新因果物語と号

加減朱子讀書丸　清覺世道人傳方

もつぱら心腎の二経を調和し精神をはぢよくし元氣をさかんにす虚症鬱症の人万ずに氣をつかひおほく辛勞する人用て大効あり

賣所　江戸　山東京店

文化改元甲子十二月吉日

書林
大坂　心斎橋唐物町　河内屋太助
江戸　大傳馬町二丁目　大和田安兵衛梓

瀧澤文庫
坂田文庫

右迹考之書文化二乙丑年
二月十二日夜あやまちて隣居板元
より板を絶してるとなん
此書は後のこ(?)ゆ(?)

購入　大本
紀元二千五百四十二年
明治十五年十二月廿五日
坂田文庫